March 20th 1909.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 203

大日本蠶絲會報

第貳百叁號

▲本號要目▼

●風穴と冷藏庫　農學士　木多岩次郎
●乾繭器は如何にして撰擇し採用すべきか　東京蠶業講習所技手　三谷徹
●蠶の神經分布の研究　愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎
●乾燥の方法及原理　東京蠶業講習所技手　小松豐作
●柞蠶は如何なる習性を有するか　勢業傳習場技手　長岡哲三
●蠶界の寵兒たるべき時機　埼玉縣農事試驗場技手　代永金太郎
●蠶種改良と卵形又昔　水野辰五郎
●予は蠶絲業に就て如何なる奬勵を爲したるか　河瀨秀治
●林式燥乾器は如何にして發明せられしか　林庫次郎
●桑園の改良は如何にして爲すべきか　愛媛縣立農學校教諭　中山重兵衛
●桑園年中行事　池田榮太郎
馬場由

▲本邦製絲界の秀宿　尾澤金左衛門君

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

第四回總會開催に就て

春も愈暖かに滿山の樹木は一雨毎に綠を增し桑の芽も日一日と伸び行くといふ年中の最好期は四月の空でありませう本會は此最好期たる四月四日を下し天下一品の稱ある後樂園に於て第四回總會を開くことに致しました後樂園は舊水戸藩の庭園で小石川砲兵工廠内にあります泉石亭榭の天然人工兼備はつて居るから紅塵萬丈の大都市の中央にドーして斯かる仙境があるかと疑はるゝ位でありますが併し常には衆人の浸に入るを許されない處でありますが然るに此度本會は此清趣閑雅の仙境に於て　總裁殿下の台臨を仰ぎ熱心なる會員諸君と共に斯業將來の大發展策を講じ得るの特典を得ました蠶絲が國家重要の物産でなければ此特典はドーして得られませう翼くは會員諸君陳續御參會せられたい然して御來會の方には新宿御苑の拜觀大隈酒井兩伯爵庭園の觀覽東京蠶業講習所生絲檢査所の參觀並に發明品展覽會（縱覽券半額にて）の縱覽を爲し得る特典をも與へられましたとて寔に感謝に堪へざる處であります當日御來會の方は男子は洋服か羽織袴を女子は紋附を着けられたい尙本會の徽章は必ず御忘れないやうに若しも佩用せられぬと折角御出でになりても式場に入ることが出來ないのみならず御苑の拜觀其他の縱覽も相叶はぬことになりますから吳々も御注意を願つておきます

特許中原式

乾燥器 佛國第三九貳三三九號
煮繭器 伊國出願中

中原式乾燥器 ボ大方諸氏の歡迎を受け所以に他器に比し使用者好評の上 收益を確實に增進せしむるか故なり其實績は設諸氏に就き詳細御調査の上 此際陸續御注文を願上候

紀念割引販賣中

賞狀抄載

金水舘 明治四十一年九月より同十二月迄試驗の結果著過繰に比し輪質少なく繰料一本に於て貳分增 繰糸工賃に於て壹割五分增 器料に於て壹割を減じた

好結果 年來し統一部更らに參臺增設す

多勢製絲場 前略此上後此れ世評を唱ふる人も有之候由に付得共之等は なるべく得の考慮に付てはいまだ知らず現今世上に現れ居る試器とし て此右に出るもの非るべく 界蒸汽經濟に於ては從來の素釜六七個は 總分事業の進捗を來し 生絲品位は勿論 に優要するも 少なく 生絲品位は勿論 のにて起れり 落繭 少なく 色澤純良に 升付 壹分五厘 以上 增量あり 使用者は 揚繭 少なく 繭も大に 減少し 來り申候前陳の通 現今に於ける 煮繭器 の一位たるは斷言 致され 候下暴

東京市本所區德右衛門町三四
電話浅草二千二百二十六番
振替貯金口座壹六五〇四番
特許中原式合資會社

大日本蠶絲會報　第二百三號

目次

口絵

●伊太利ノシーナ大震災後の惨景●本邦蠶絲業界の耆宿尾澤金左衛門君●信州岡谷に於ける尾澤組製絲所の全景並に同所揚返場一部作業の光景

論叢……一―一四

●風穴と冷藏庫　農學士　本多岩次郎
●乾繭器は如何にして選擇し採用すべきか　東京蠶業講習所技手　三谷徹
●蠶の神經分布の研究　愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎
●乾燥の方法及原理　東京蠶業講習所技手　小松豊作

集芳……一五―二五

●柞蠶は如何なる習性を有するか　勤業校鎮場技手　長岡哲三
●蠶界の寵兒たるべき時機　代永金太郎
●品種改良と卵形又昔　埼玉縣農事試驗場技手　水野辰五郎

叩門……二六―三〇

●予は蠶絲業に就て如何なる奬勵を爲したるか　河瀨秀治
●林式乾燥器は如何にして發明せられしか　林庫次郎
●桑園の改良は如何にして爲すべきか　群馬縣老農　中山重兵衛

心影……三〇―三三

●大日本蠶絲會の恩人尾澤金左衛門君　編者

實務……三四―三七

●桑園年中行事　愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎

絲市場況……三八―四一

●横濱市場　馬場由

通信……四一―四四

●長崎縣蠶絲業に關する通信　古賀治八郎
●佐賀縣蠶絲業に關する通信　玉木浪三郎

問答……四四―四六

●紋羽病に就き質問錄答●桑病に就き質問錄答●蠶種の件に就き質問錄答●二化性蠶種の黑種となる原因に就き質問錄答●蠶座の代りに紙を使用する件に就き質問錄答●繭の形狀に就き質問錄答

會務錄事……四六―四八

●評議員會●支會幹事の囑託●地方委員部幹事の囑託●學藝委員の囑託●關稅調査委員會●理事及書記の出張●學藝委員の出張

雜叢……四八―四七

●成功する者はドコか違ふ●アメリカ油定溶油室●蠶の生命スタンキに在り

蠶桑雜觀……四八―五六

●柳木縣蠶業の發達●新嘗後の船出船●廣東の牧蠶商●ウオルター氏の逝去●人造絹製造の沿革●富山支會總會●大分縣蠶業視察團●●文藝●蠶界出來事●人事欄報

本邦製絲界の耆宿尾澤金左衛門君

Monsieur K. Ozawa, éminent sériciculteur de notre pays.

次號目次

當業者座右の顧問として缺くべからざる本誌の次號に掲載する目次中重なるもの左の如し

●農業組織に於ける養蠶の位置　農學博士　横井時敬

●岐阜の種　農商務員　吉池慶正

●予は先づ其罪を製絲家に問はん　蠶業講習所技師　町田横

●蠶業教育と形式的及風紀　蠶業講習所技師　深津鐵太郎

●蠶業術の最大要訣　生駒與一郎

●富山支會の事蹟　富山縣技師　渡邊亥八

●風穴秋蠶種の出穴に就て　京都蠶業講習所技手　渡邊準太郎

●紐育に於ける信州生絲の聲價　在紐育　福島延惠　佐藤國藏

●四化蠶論

●農業保護關稅の價値　神戸高等商業學校教授　津村秀松

●大隈伯の談話に於ける予が感想　加藤知正

讀者と前號に約したる尾澤琢磨濱口雄幸鳴地恒雄三氏の原稿は記事輻湊の爲掲載するを得ざりしは其不遑恢とする處なり次號より順次掲載すべきを以て諸君其意を諒せられたし

投稿者への御注意

頃者續々本誌に投稿せらるゝもの多きは深く感謝する處でありますが併し記事の都合に依りて折角の御寄稿も直に掲載し得ぬ事があります為め邊は豫じめ御承知ありたい又何故に掲載せぬか掲載せぬなら返せなど、紛議せらるゝ方もありますが取捨は編者筆中の權に在ることなれば直今掲載せんても御返しは全然せぬといふ内規でありますから其御含みで……尚一原稿を數個所に投ぜらるゝ方もありますが若し其事が解りますれば本誌は斷じて掲載しません一旦新聞等に出しになつたものも同樣に取扱ひますから必ずとも辱るく思召さぬやう願ひます。

冒記寄稿の御寄稿は本誌の最も歓迎する處でありますが御所持の方は何なりと御願ひしたい

信州岡谷に於ける尾澤組製絲所の全景
Panorama de la Filature "Ozawagumi" à Okaya, Shinshu.

同上揚返場一部の作業光景
Salle de redévidage à la même Filature.

昨年十二月下旬稀有の大震災に遇遭せるメシーナの惨景

破壞サレタル市全景

港ノ人道

街レウニマエヴリトツビ

搬運ノ服衣及料飲

昨四十一年十二月二十八日に於ける伊太利「シ、ー、ヲ」島及「カラーブル」州沿岸の大震災は實に稀有の大慘狀を呈したり殊に生絲の產地として歐洲市場に其名を知られたる「メシーナ」の全滅したるは吾人斯業に關係する者の轉々同情の念に堪へざる處なるが此口繪は伊國「カデヤ」大學教授「ポリオシー」氏より野村產太郎氏へ送り越されたる繪葉書なり其慘景の一般を忍ぶに足るを以て特に乞ふて茲に掲ぐることゝ爲しぬ

大日本蠶絲會報　第貳百參號

叢論

風穴と冷藏庫

蠶業試驗場員
農學士　本多岩次郎

蠶種問題は即ち風穴問題

近時夏秋蠶の飼育盛んなる隆盛を極むるに至つたが爲めに、之に伴ふて潮起する所の問題が甚だ多い、蓋し發達日尚ほ浅きが爲めに、之れが經驗上の經驗に乏しく且技術上の根本たるべき所の學理に於ても尚ほ未知の事項が多いからである。而して此等諸問題の中、蠶種の貯藏保護に關する事は其だ重要なるものゝ一つである。元來秋蠶種なるものは、概ね人工に依りて蠶卵の發生期を抑制し若くは抑制せる蠶兒に依り製造するもので其抑制の手段は、又飽ね風穴と稱する天然冷所を利用するものであるからして、今の處にては秋蠶問題は、即ち蠶種問題で、蠶種問題は即ち風穴問題であると云ふても宜い位である、然るに此風穴なるものは、元と偶然の事實に由りて發見せられ且利用せられつゝあるに過ぎぬので、精確なる學術的の研究を經たものでない、故に未だ準據すべき一定の理論が明かに分つて居らぬ、只々多數當業者の經驗に依りて利用の効を奏して居るに過ぎない、夫れ故に此風穴なるものに蠶種を貯藏する方法其他の取扱に就ては現時尚ほ據るべくして違ふべからざる底の確乎たる方法がないのである。

何故に夏秋蠶試驗場を開始したか

秋蠶は世人の知る如く年に依りて豐凶の差が非常に多い其原因は素より種々あり決して單純なものではないけれども貯藏保護の適否が至大の關係を持つて居ることは決して春蠶の比にあらざるは多言するまでもない、特に蠶種の發生の良否と云ふが如きは殆んど全く此貯藏保護の如何にあると云つても宜い。

然るに風穴に貯藏せる蠶種に在りては單に此發生の良否と云ふ事丈に就ても年々歳々同一の好結果を見ることが出來ないと云ふ所以は畢竟するに貯藏上未だ確乎たる適然の方法が發見せられないからである。

之を以て東京蠶業講習所では本年度より長野縣松本市に於て夏秋蠶試驗事業を開始し諸他の事項と共に此等の調査研究

を行ふことにした、即ち最低攝氏〇以下五度より最高攝氏拾五度に至る各種の溫度を保持すべき冷藏室拾數ケ所を設けて、蠶種の貯藏供試上に關する所の原理并に方法等を講究することと、試したのである、此處數年の中には生徒に種々なる疑問を解決し得ることと信ずるのである。

冷藏庫の試驗は風穴改良が目的

然るに近來當業者より若し果して冷藏庫に依りて蠶種の貯藏が行はるる樣に至つたならば、從來の風穴なるものは、全く無用のものとなるではないかと云ふ樣な疑問を受くることが屢々ある、又實際風穴を經營する者の中にも、昨年東京蠶業講習所に於て冷藏庫の成績を教め得たることを聞知し之と同樣の杞憂を抱く者が少くない樣に傳聞して居る。

併し吾人の觀る所に據れば是は眞に一箇の杞憂に過ぎない驗を行ひ蠶種の貯藏を試驗を行ふ所以は之に依りて蠶種の貯藏上に於ける適當なる溫濕度や又は取扱等を研究して、風穴改良に資するが爲めである、再言すれば則ち風穴なるものの改良を圖らんが爲めであつて、敢て風穴に替ゆるに冷藏庫を以てせんとする樣な目的ではなく又之を實際上より觀察するも冷藏庫を以て試驗して可なる場合若くは之を經營して利益ある場合は無論風穴なるものの改良を圖らんが爲めである、而して實際の經營者が出來ぬとは云はれぬ、けれども之に依りて風穴なるものが直に大打撃を蒙むるものと信ずるは甚しい速斷であると云はねばならぬ、何となれば、元來冷藏庫なるものは、風穴に比すれば五度に至る各種の溫度を保持すべき冷藏室拾數ケ所を設けて、蠶種の貯藏供試上に關する所の原理并に方法等を講究することと、試したのである、此處數年の中には生徒に種々なる疑問を解決し得ることと信ずるのである。

之れが建設に要する費用は頗る多大であるのみならず、之を運轉するには相當の技術者が必要で、燃料其他の經費も決して少くはない、風穴は之に反し曾て固定資本が少いのみならず、他の經費に於ては兩者は到底比較にならぬのである。

夫れ蠶種を貯藏する時期は毎年一二月頃より七八月頃までに過ぎぬ、他の四五ケ月間は全く無用に遊ばせる譯であるから、冷藏庫の効力多くの資本を固定するものでは此點に於て甚だしい不利益を受けねばならぬ。

風穴が廢たると思ふは杞憂

或は他の物品の貯藏と兼ねる能はざる冷藏を必要とする時期は即ち蠶種の貯藏期であるから、其上蠶種は他の物品と混同して貯藏室を設ける必要がある、其上蠶種は特別なる貯藏室を設けるから、又は特種の設備を必要とする、左れば蠶業とした所が格別大なる經費の節減を爲し得ることは云ふ譯にはゆかぬ、勿論風穴は僅ぬ山間避暑の地に在るものであるし、冷藏庫は交通運搬等に便利なる市街の場所に建設し得るからして、何處に於ても任意の場所に建設しても可なる筈である、而して風穴が僅少の冷藏庫業者が起りたればとて直に廢絶に歸する樣な心配の有ろう筈がないのである、今後とても其多數は風穴貯藏に依るものと觀る方が事實に近いことは信ぜらるゝのである、特に夏秋蠶試驗場に於ては、普通の運命を待つて居るものであるから、或は他の物品貯藏の旁ら蠶種の貯藏を經營する者の出ない限りは、此場合に於ては成績の不良なる風穴が先づ其蠶食を繰むるは時勢である、併し此場合に於て之を必ずしも冷藏庫の爲めに嘱して打撃と稱するとは、學ろ世の進歩に伴ふて起る必然の現象であると謂はねばならぬことである。

然るに此等の事は一に成績の良否と經濟上の得失とを要するに此等の事は何れにして現在と採用すべきか

最後の決勝點は成績の可否と經濟上の得失

夫れ故に問題は只成績の良否如何に在るのみと云ふて宜い、然しも風穴なるものが此上更に改良せらるゝことなく、從來多數の風穴に於て見る樣に年々の成績が不安定で、時々多くの不幾生物を生ずる樣にては其前途頗る怪しいものと思はねばならぬ。

何となれば土地の事情に依て善良の風穴を得難いとか、若くは風穴に依ること甚だ不便である爲に前述の如く冷藏庫に依ることが便利なる場合が無いとか、又一方に於ては冷藏庫なるものは將來各種の物品に對し益々多くの不幾生物を生ずる樣にては其前途頗る怪しいものと思はねばならぬ。

夫れ故に問題は只成績の良否如何に在るのみと云ふて宜い、然しも風穴なるものが此上更に改良せらるゝことなく、從來多數の風穴に於て見る樣に年々の成績が不安定で、時々多くの不幾生物を生ずる樣にては其前途頗る怪しいものと思はねばならぬ。

何となれば土地の事情に依て善良の風穴を得難いとか、若くは風穴に依ること甚だ不便である爲に前述の如く冷藏庫に依ることが便利なる場合が無いとか、又一方に於ては冷藏庫なるものは將來各種の物品に對し益々多くの不幾生物を生ずる樣にては其前途頗る怪しいものと思はねばならぬ。

實に近いことは信ぜらるゝのである、特に夏秋蠶試驗場に於ては、普通の此貯藏上に關する原理や方法を講究する見込である場合に於ては、此等の事が明かになつた暁に於ては、多少風穴の改良を圖らんが爲めに、上より觀察するも冷藏庫を以て試驗して可なる場合若くは之を經營して利益ある場合は無論風穴なるものの改良を圖らんが爲めである、而して實際の經營者が出來ぬとは云はれぬ、けれども之に依りて風穴なるものが直に大打撃を蒙むるものと信ずるは甚しい速斷であると云はねばならぬ、何となれば、元來冷藏庫なるものは、風穴に比すれば五度に至る各種の溫度を保持すべき冷藏室拾數ケ所を設けて、蠶種の貯藏供試上に關する所の原理并に方法等を講究することと、試したのである、此處數年の中には生徒に種々なる疑問を解決し得ることと信ずるのである。

冷藏庫の試驗は風穴改良が目的

然るに近來當業者より若し果して冷藏庫に依りて蠶種の貯藏が行はるる樣に至つたならば、從來の風穴なるものは、全く無用のものとなるではないかと云ふ樣な疑問を受くることが屢々ある、又實際風穴を經營する者の中にも、昨年東京蠶業講習所に於て冷藏庫の成績を教め得たることを聞知し之と同樣の杞憂を抱く者が少くない樣に傳聞して居る。

併し吾人の觀る所に據れば是は眞に一箇の杞憂に過ぎない驗を行ひ蠶種の貯藏を試驗を行ふ所以は之に依りて蠶種の貯藏上に於ける適當なる溫濕度や又は取扱等を研究して、風穴改良に資するが爲めである、再言すれば則ち風穴なるものの改良を圖らんが爲めであつて、敢て風穴に替ゆるに冷藏庫を以てせんとする樣な目的ではなく又之を實際上より觀察するも冷藏庫を以て試驗して可なる場合若くは之を經營して利益ある場合は無論風穴なるものの改良を圖らんが爲めである、而して實際の經營者が出來ぬとは云はれぬ、けれども之に依りて風穴なるものが直に大打撃を蒙むるものと信ずるは甚しい速斷であると云はねばならぬ、何となれば、元來冷藏庫なるものは、風穴に比すれば五度に至る各種の溫度を保持すべき冷藏室拾數ケ所を設けて、蠶種の貯藏供試上に關する所の原理并に方法等を講究することと、試したのである、此處數年の中には生徒に種々なる疑問を解決し得ることと信ずるのである。

之れが建設に要する費用は頗る多大であるのみならず、之を運轉するには相當の技術者が必要で、燃料其他の經費も決して少くはない、風穴は之に反し曾て固定資本が少いのみならず、他の經費に於ては兩者は到底比較にならぬのである。

夫れ蠶種を貯藏する時期は毎年一二月頃より七八月頃までに過ぎぬ、他の四五ケ月間は全く無用に遊ばせる譯であるから、冷藏庫の効力多くの資本を固定するものでは此點に於て甚だしい不利益を受けねばならぬ。

風穴が廢たると思ふは杞憂

或は他の物品の貯藏と兼ねる能はざる冷藏を必要とする時期は即ち蠶種の貯藏期であるから、其上蠶種は他の物品と混同して貯藏室を設ける必要がある、其上蠶種は特別なる貯藏室を設けるから、又は特種の設備を必要とする、左れば蠶業とした所が格別大なる經費の節減を爲し得ることは云ふ譯にはゆかぬ、勿論風穴は僅ぬ山間避暑の地に在るものであるし、冷藏庫は交通運搬等に便利なる市街の場所に建設し得るからして、何處に於ても任意の場所に建設しても可なる筈である、而して風穴が僅少の冷藏庫業者が起りたればとて直に廢絶に歸する樣な心配の有ろう筈がないのである、今後とても其多數は風穴貯藏に依るものと觀る方が事實に近いことは信ぜらるゝのである、特に夏秋蠶試驗場に於ては、普通の此貯藏上に關する原理や方法を講究する見込である場合に於ては、此等の事が明かになつた暁に於ては、多少風穴の改良を圖らんが爲めに、上より觀察するも冷藏庫を以て試驗して可なる場合若くは之を經營して利益ある場合は無論風穴なるものの改良を圖らんが爲めである、而して實際の經營者が出來ぬとは云はれぬ、けれども之に依りて風穴なるものが直に大打撃を蒙むるものと信ずるは甚しい速斷であると云はねばならぬ、何となれば、元來冷藏庫なるものは、風穴に比すれば五度に至る各種の溫度を保持すべき冷藏室拾數ケ所を設けて、蠶種の貯藏供試上に關する所の原理并に方法等を講究することと、試したのである、此處數年の中には生徒に種々なる疑問を解決し得ることと信ずるのである。

冷藏庫の試驗は風穴改良が目的

然るに近來當業者より若し果して冷藏庫に依りて蠶種の貯藏が行はるる樣に至つたならば、從來の風穴なるものは、全く無用のものとなるではないかと云ふ樣な疑問を受くることが屢々ある、又實際風穴を經營する者の中にも、昨年東京蠶業講習所に於て冷藏庫の成績を教め得たることを聞知し之と同樣の杞憂を抱く者が少くない樣に傳聞して居る。

併し吾人の觀る所に據れば是は眞に一箇の杞憂に過ぎない驗を行ひ蠶種の貯藏を試驗を行ふ所以は之に依りて蠶種の貯藏上に於ける適當なる溫濕度や又は取扱等を研究して、風穴改良に資するが爲めである、再言すれば則ち風穴なるものの改良を圖らんが爲めであつて、敢て風穴に替ゆるに冷藏庫を以てせんとする樣な目的ではなく又之を實際上より觀察するも冷藏庫を以て試驗して可なる場合若くは之を經營して利益ある場合は無論風穴なるものの改良を圖らんが爲めである、而して實際の經營者が出來ぬとは云はれぬ、けれども之に依りて風穴なるものが直に大打撃を蒙むるものと信ずるは甚しい速斷であると云はねばならぬ、何となれば、元來冷藏庫なるものは、風穴に比すれば五度に至る各種の溫度を保持すべき冷藏室拾數ケ所を設けて、蠶種の貯藏供試上に關する所の原理并に方法等を講究することと、試したのである、此處數年の中には生徒に種々なる疑問を解決し得ることと信ずるのである。

最後の決勝點は成績の可否と經濟上の得失

夫れ故に問題は只成績の良否如何に在るのみと云ふて宜い、然しも風穴なるものが此上更に改良せらるゝことなく、從來多數の風穴に於て見る樣に年々の成績が不安定で、時々多くの不幾生物を生ずる樣にては其前途頗る怪しいものと思はねばならぬ。

何となれば土地の事情に依て善良の風穴を得難いとか、若くは風穴に依ること甚だ不便である爲に前述の如く冷藏庫に依ることが便利なる場合が無いとか、又一方に於ては冷藏庫なるものは將來各種の物品に對し益々多くの不幾生物を生ずる樣にては其前途頗る怪しいものと思はねばならぬ。

乾繭器は如何にして選定し採用すべきか

東京蠶業講習所技手　三谷徹

生繭で賣るよりも結果がまづいとはどうしたものか

近來繭の繁殖が夥しくなつた爲めに彼は實に大なるものである、そして其繁殖する一大原因は恐らく生繭賣買によりて知らず識らず間接に繭を散せしめる結果、乾繭賣買を行ふに成る べく生繭賣買を止むる云ふ方針を以て一般蠶業に乾繭器の設備を促す地方も少からぬやうである、之れは誠に結構のことである、否此乾繭器の設置は蠶業家の自營上に於て繭屑陸上の効用のみならず、予は更らに蠶業家の自營上

よりして尚一層之れが必要を感ずるものである、試みに昨年に於ける繭取引の狀況を見られよ、容易に其必要が感ぜらるゝのである、即ち一昨年末以來絲價の暴落は頗る製絲家の經濟を危殆に貧せしめた結果一般に金融が圓滑に行はれなかつた爲めに繭價も近年稀れなる非常の廉價であつた、否な非常な廉價と云ふだけでなく或地方の如きは折角苦辛慘憺で得た繭を賣るにも其買手がなく、生繭を積んで其處置に困り遂に法外な投賣をしたと云ふ樣な事實もあつたやうである、若も此際養蠶家に乾繭器の設備があつたならば其收繭を乾燥貯藏して適當の時期を見計らひ販賣するの便利が得られたであらう、從て斯の如き場合に處しても決して投賣をする樣のことはないのである、よし昨年の如きことはないとしても乾繭て置けば無暗に商仲買商人などの奸策に乘せられて大なる不利益を被むるやうのことはない、故に予は蠅蛆驅除と云ふよりも寧ろ自己の利益保護上よりして養蠶家に之れが設立を希望するのである、併し近年は養蠶家も大に其感を深ふしたと見へ各地方共之が設置を稱導する聲が漸く多くなつたやうである、又地方の當局者も亦大に之れが勸策に盡瘁して居らるゝやうであるのは甚だ喜ばしい次第である、が退いて從來設立せられた養蠶家の乾繭器を見に其不完全極るものが多やうである、爲に不必要の經費を掛て折角設立した乾繭器も其効果が揚らず否な却て繭質を損じ終に生繭にて賣よりも餘程其價を低せねば賣捌ふとが出來ないと云ふ樣な奇妙な現象を呈し、甚だ困て居る地方があるのは甚だ遺憾の局である、之は即ち從來此乾繭器の選定方法を誤しに基くより外ないのである、

故に予は養蠶家に乾繭器の設備を望と同時に當局者及び當業者に向て大に乾繭器採用方に就て一言警告し置たいと思ふ。

不完全なる乾繭器の爲に生ずる弊害とは何か

抑も養蠶家が幾多の資財を投じて乾繭器を設立する所以のものは主として繭質の保全を計りて最も有利の取引を行ひ、其利益を増大したいと欲するに外ならないのである、想ふに當業者は勿論當局者も之れが設置の意志は恐らく玆に有ることを疑はないのである、果してそうならば繭質の保全に最大關係を有する乾繭器は其構造に於ても又其裝置の點に於ても最も完全なるものを選ばねばならぬ事は論ない事であるが、併し予は彼の完全なる乾繭器は比較的に高價であるから當業者も多くは其經費を吝んで遂に粗造不完全なる乾繭器を建設しはせぬかを恐れるのである、實際從來設置せられたものには斯の如きものが多い樣に思はる、是は畢竟養蠶家には繭乾燥なる智識及經驗がないからして養蠶家は概ね乾繭器の完否により繭質に如何なる關係を及ぼすものであるかを良く辨知しないから、其器械は多少不完全でも先づ乾燥が出來れば事足るのに特更高價な器械を備付ける必要はないとの考を起すものもあらうが、又乾繭の業務は一年間只僅に數回で其使用日數は只十數日に過ぎない、乾繭器に向て巨額の資本を投ずるのは經濟上極めて不利であると信ずるものがあらう、凡て此等の誤想や謬見が遂に驅て經費を投ずることに吝なる樣な結果を惹起して不備不完全なる乾繭器を採用するに至るのは

數の免れない情勢であらう其事情が已に斯の如くであるのに若し此際之れが獎勵の任に當るものが其資本が多くては乾繭器の普及は容易でないとの杞憂を抱き狂げて當業者の意を迎へ、其經費の少ない、不備不完全なるものを設けやうと計るが如きことがあつては彼の繭質の保全は到底保むことが出來ないのみでなく遂に自衞上有益なる乾繭器も爲めに却て有害なる事業と認むるとなるのである、然らば當業者の不利益は勿論の事延て國家の損失も亦之より甚だしいものはない、依て吾輩はたに乾繭器の不完全なるものによりて生ずる所の弊害を述て聊か當業者及び當局者の一考を煩はしたいのである。

一、乾繭器の溫度が平均しないもの及び通風作用の普ねく行はれないものは器内に於ける各部の繭の乾燥程度に著しい差異を生ずるので其結果として其溫度の高き所にある繭は已に過乾に失するやうでも其低き部分にある繭は未だ乾燥が充分でないと云ふ樣な弊害を來す事を免れない爲めに其過乾に失せるものは焦損し其不充分なるものは他日黴腐を釀すに至るのである、ソシテ若し斯樣に焦損や黴腐となるよすれば爲めに受くる製絲上の損害は實に莫大なものである先づ之れを試驗した結果によりて示せば實に左表の如くてある。

種別	製絲時間	絲量	屑物	色澤	纖度	類節	強力	伸度
標準繭	一、四五	一二、二五	三、四三	佳	一三、五	七三	五一	一〇四
過乾繭	二、一三	一〇、九〇	四、二〇	否	一三、〇	一〇七	四八	九八
黴繭	一、三三	九、三〇	五、一〇	最否	一三、二	一一六	四五	一一〇

以上の表によりて試みに一時間の工賃を三錢として十匁の生絲の價を六拾錢と見積り絲價を過乾のものは一割方黴繭は二割方低いものと見做して計算したならば繭一升に付標準に對して過乾に失したものは時間に於て一錢四厘の損をし絲量に於ては七錢五厘の損を來し絲價に於ては六錢五厘を損して居る割合と爲る又黴繭は時間に於て六厘絲目に於て實に拾七錢七厘絲價に於て拾一錢二厘を損ずる譯である、此等の損害を打算して繭一升に對する價格を定むると標準繭一升五拾錢の價である時ならば過乾繭は三拾四錢六厘黴繭は拾錢五厘の値へに過ぎないのである、夫れだから畢竟乾燥の宜しくない結果過乾繭は一石に就て拾五圓四拾錢の損をし黴繭は拾九圓五拾錢の損をする計算となる、其損失の莫大なのには驚かざるを得ないのである。

一、適當の溫度を保ち得ることの出來ないものとか給熱量の比較的少ないものとか、或は換氣作用が完全に行はれない所の乾繭器なれば自然乾繭の工程に長き時間を費して徒らに乾繭の業務の進捗を阻害するからして業務が極めて煩雜になるばかりでなく多くの工費を要することを免れないのである、加之其繭質を著しく惡變せしむるからして繰絲に非常な困難を感ぜしむるやうになり畢竟は絲目を減じたり絲の質を害ふやうな損失を招くものである、今試驗成績によりて其損失の度合を明かに示せば左表の如くである。

乾繭器は如何にして選定し採用すべきか

種別	時間	絲量	屑物	色澤	纖度	糸節	強力	伸度
標準繭	一三五	九〇九	二〇七	佳	一三〇九	四九七	三〇
長乾繭	八七三	三〇五	否	一四三	二四七	四九	七二

前例に倣ひ以上の表に依りて繭の價を計算したならば繭糸代用が繭に換算して行はれなかつたが爲め、乾繭に長時間を要した所の長乾繭は其全に行はれた標準繭に比して時間に於て二厘又絲價に於て五錢二厘（標準の絲より一割方安價と見ての計算である）を損するになるからして都合七錢九厘の損失となるのである。今標準繭一升の價を五拾錢と見做したならば長乾繭は實に四拾一錢一厘の低價格となるのである、だからして之れが爲めに受ける損失も亦決して尠少と云ふ譯ではなからう。

一、火から生ずる所の熱を直ちに繭に觸れしむるものであると煙煙や煙埃で繭色を汚損するばかりでなく木炭から發する處の色々の瓦斯の爲めに非常に損害になる今試驗成績によりて其損害の程度を示す上左表の如くである。

種別	時間	絲量	屑物	色澤	纖度	糸節	強力	伸度
標準繭	一三〇	一二五	三〇三	佳	一四〇	六七	三五	一三三
瓦斯繭	一二七	一一七	三三三	否	一四五	九四	五四	一一七

以上の表によりて又繭の價の計算を行ふたならば炭火を直ちに繭に觸れしめたものは其然らざるものに較べて時間に於て四厘絲目に於て五厘絲價に於て三錢五厘、間接熱繭糸に比して五分（安價と見た計算である）を損する譯で都合四錢四厘の損失となるからして間接熱によつた乾繭を一升五拾錢と見做せば直接熱によつた乾繭は四拾五錢六厘の低價格となるのである。之れも亦其損失が些少とも云はれない。

一、繭器は如何に繭質を損傷しどんな不完全な繭器が如何に繭質に於て不完全な繭器が如何に繭質を損傷しどんな不完全な繭器に當業者に損失を與ふるものであるかは、前數項に於て既に述べた如くであるが、其述べた損失は單に其乾繭に就てのみ打算したまでゝあるから其外以外實際製糸家にありては其生産額が少ない爲め工場に於ける種々の經費と金利との損失が更らに加はるからして斯の如き不良な乾繭を購入する場合になると是非共前記の價格よりも以下で購はなければならぬ、又製糸家の方でも斯樣な繭は決して喜ばないのである、之れ乾繭賣買が盛んに行はれない所の他にも多少の理由はあらうが、畢竟乾燥法の不完全であると云ふのが其主なる原因であらうと思ふ、夫れだから養蠶家は生繭で賣れば少なくとも一升四十七八錢は得られる、繭を生産して居りながら乾繭器を設けて殊更らに巨額の資本を掛け、又更らに多くの工費を加へて乾燥した結果は殆んど想像にも及ばない低價で販賣せなければならんことになる世間で恐らくは之れ程愚なことはあるまい、其增産の赤條件と云はなければならぬ。

一、乾繭器は概して非常に高い熱度を加へて蚕を絶命なく使ふものであるから、其構造に少しにても不完全な

所があれば其處から忽ち破損し始めて使用に絶へなくなる、然るに斯樣に其完全なるものは容易に得難いとしないとするも其れを使續するには尠なからぬ費用が入る、そして製糸業の如きは豫定の通り運ばないが爲め一大障害を生じて終には殺蛹乾繭の期を誤り、又は出蛾發蛾の危險に遭遇するやうになる、時には極めて多忙の際であるから若し其破損に心用かないことであれば、レこそ火災の不幸を惹起することがないとも限らない、彼乾繭事業に對しては多大の經驗と熟練とを有して居る製糸家にありても、尚且年々其構造の不完全なるが爲めに火災を惹起すことが尠なくない、やうである、ドウして經驗と何もない養蠶家に不完全な乾繭器を採用せしめて過失を侵むは恰も木に據りて魚を求むるより尚甚しからう。（未完）

蠶の神經分布の研究

愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎

此研究が有力に望り岩手縣立農學校養蠶科卒業生井上鶴七君の助力を得たること大なりは明治三十九年以來現今に至るまで原心解剖の研究に從事し其間に於て絶えざる神經の分布に關する研究に因りて始めて目的を達せるを以て茲に冒頭記して氏の勞力を謝す

蠶の神經は生理上最重の器官であるにも係らず今日未だ其解剖の其だ到らぬものであるのは、斯學の爲に遺憾とするところである、予は近年之を研究し神經分布の狀を明かにすることが出來たから第一頭部神經第二神經枝分布第三筋肉との關係に分つて之を論述しやうと思ふのである。

第一、頭部神經

（一）幼蟲の腦神經

蠶兒の腦神經は從來調査せられたのと大差がないけれども順序であるから併せて之を論及しやう、但腦神經とは最も密接の關係があるから併せて之を論及しやう。

食道上神經即ち腦は胚子發育の際第二環と第三環の横に相合して出來たもので五節の蠶の腦である、と經程〇、二一横徑〇、四三ミリメートルの大さを有し、尖つた一端は下方に向ひ、此ところから上部に四條、下部に二條側方に一條の神經絲を出して居る、上方に向ふものゝ中最も内方のものは腦を去る〇、四三ミリメートルのところで左右相合し小球を造つて居るが之を前腦と云ふのである、前腦は胚子發育の際第一環の退化したもので之より上下に神經絲を出し、前方に進んだものは柴の如く分枝して上唇に分布して居るが下方のものは背腦と共に長く食道上に走つて居る、其大に位するものは上唇及上顎に達するもので〇、〇一二ミリメートルを有して居る、先端が六分して各單眼に入り、一條は長く筋肉の間を通過し腦の腹面に進入して居る。

腦より下方に向つて出て居る神經は球中線くて〇、〇一二ミリメートルを有して居るものは食道を圍繞して環狀をなして

居る、他の大なる一本は、〇、二三ミリメートルを有し、〇、八五ミリメートルの處で食道下神經球に迫つて居る、側方に出て居るものは〇、〇一ミリメートルの大さを有し、糾めに腦を去りて居るが凡そ〇、六ミリメートルのところで扁平なる星狀の神經球をつくり之より又同じ大の神經球を上方に出し二分して一は再び腦に達し、一は長く前方に延びて上唇神經束に沿ふて上唇の附近に分布して居る、此星狀の神經球から下方に二本の神經束を出し一は直ちに二分して筋肉の間に分布し、一は〇、二ミリメートルの後方に於て此處に球狀の小神經球を造つて居る、其大さは〇、〇一五ミリメートル内外である。

而して此神經球よりは三四條の神經束を出し、唾腺及び食道筋肉に分布して居る、此神經束を頭部交感神經と稱し、唾液の分泌及び食道の運動を發せしむる作用をなすものである。

食道下神經球は腦を去る〇、八五のところに、背脈管と食道の間に隔て存在し、縱徑〇、三二ミリメートル、横徑〇、九ミリメートルの大さを有し、三角形を呈して居る、此神經球よりは腦に連る、一對の神經束の外三對の神經束を出し、上顎下唇に進入分布して居る、就中下唇に至る神經束は最も多く分枝せるとヨ（ロ）に示した如くである。食道下神經球には第一氣門より分枝して來る氣管の先端を抱き球の上下に灰白部を造つて居る、向ひ此球の下側より出づる一對の神經束は腹部の第一環節の始め迄入し、先端數枝に分岐して、背脈管の兩側に分布するなり。

蠶の神經系の主要部であつて食桑と關係する重大なる生理作用を營むところのものである。

第一圖　蠶兒の頭部神經

イ、腦
ハ、上唇神經
ホ、觸鬚神經
ト、食道筋
リ、下顎神經
ル、第一環節
ワ、氣管
カ、頭部交感神經
ロ、腦腦
ニ、視神經
ヘ、複眼
チ、上顎神經
ヌ、下唇神經
ヲ、第一環節に至る神經
タ、下唇神經の分枝狀

（二）蠶蛾の腦神經

繭の腦神經は蠶兒のものと頗る其趣きを異にする、即ち食道下神經球と全く癒合し之に食道と背脈管を通ずる小孔を穿てるのみである、此孔は三角形で五角に起蠶にありては縱經〇、〇九幅〇、一一を有して居る、而して腦の長さ（横）は、五四ミリメートルである、腦の背面は非常に發達し幅は〇、三八ミリメートル、視神經は〇、六八ミリメートルである、腦の背面から出なる觸鬚神經束は基部に於て幅九を〇、〇八五あるのである、此神經は觸鬚の第一環節に於て幅九を〇、〇八五あるのである、此神經束は觸鬚の第三環節より二本に分岐して其先端まで達して居る。

腦の上部稍背面に方りて一對の神經束を出し腦を去る約〇、四五ミリメートルのところで分一し、こゝに小孔をつくつて居るが之を前腦と稱するのである（乙圖ヲ）、前腦よりは上唇と下神經を出し、上の孔は先端が分枝して上唇に入り下の孔は背脈管と共に小孔を通過して長く背部に延長して居る、中央前腦に至る神經束の基部から一對の神經束を出し前腦神經束と殆んど接着して進み其先端が口器に進入して居る（乙圖メ）腦の下部即ち食道下神經束に相當する部分から二本の縱走神經束（乙ワ）を出して第二神經球幼蟲の第三環に連つて居る。

前腦よりも後方に下降する神經束よりは前腦を少しく下つたところから左右に一對の神經束（乙圖オ）を出し、觸肢神經の基部に小球を作つて居るが其大さは幅〇、一八長さ〇、二四あるのである。（乙圖カ）

今腦の下側を精査するに甚だ複雜な狀態となつて居る、即ち腦の兩側からは細き一本の神經束を出し（甲チ）先端が二三に分岐して居る、又食道神經の外側に沿ふて神經環（甲ニ）を有して居る、是は幼蟲の神經環であつたものが殘存したのであらう。

交感神經は食道通過孔の兩側から出て基部は一本であるけれども直ちに二本となり腦を去ること凡そ〇、一八ミリメートルの處で扁平の小球（甲ト）を造り之より下部一本の神經束を出し〇、八五ミリメートルの處で殆んど細狀に細い神經を生じて居る。

交感神經束を造り（甲ヘ）之に毛狀の細い神經を發出し、背脈管食道に分布して閉塞し、同時に（ホ）なる神經束も閉塞するものである、故に實驗の際特に注意せなければ之より切斷して全部を極することが出來ないものである、尚ほ又（ト）より（チ）に向つて細き神經束を出し、小なる扁平部をつくり之から出た細枝によつて（ヌ）に附着して居る。

（ヘ）なる交感神經球は從來蠶蛾の唾腺と誤認せられたものであつて子蛾も又同一の誤認をしたものである、然るに近來の實驗に依り唾腺は（ヘ）球の傍らに存するばかりでなく幼蟲時代の交感神經の變形したものであることを確めたのである。

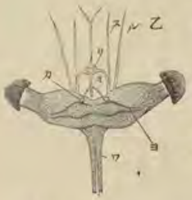
又（ヘ）、球の兩側を檢するときは甲圖に示すやうな位置にあたり、常に（ヨ）なる小神經束を見るのである、神經束の大さは〇、〇一七ミリメートルの細小なものである、から、其起點を見出すに困難したが、屢々實驗の結果終に第二球交感神經の一部で、第二球より糾めに〇、八五ミリメートルのと

ころに上つて存在して居るものであるといふとを確め得た、乙圖(ヨ)は本球と其神經絲を擴大したものである。

以上の調査に依り幼蟲の腦神經と成蟲のものとは略ぼ變態の順次を察することが出來るが(カ)及び(ヨ)の二神經は幼蟲に於て未だ實驗し得ないものである。

第二圖

甲 腦神經を下側より見る



甲上背面交感神經を去りたるもの

イ腦
ロ觸肢神經
ハ神經
ニ神經環
ホ背脈管に至る神經
ヘ交感神經球
ト交感神經扁平球
チ神經糸
ヨ第二球の交感神經球の位置を示す
ロ觸肢神經
リ前腦
ヌ下脣神經
ル口器に至る神經
ヲ背管神經分枝

ワ縦走大經神經絲
ヨ甲に同じ腦神經を裏面より神經糸發出の狀を見る
カ腦上神經球(百十倍)
カ腦上神經球

乾燥の方法及原理

通常會員 東京蠶業講習所技手 小松豊作

(ロ)熱氣乾燥とは如何なる方法か

人工乾燥法の中で熱氣乾燥法が尤も自然を利用した即ち自然に適へる良法であることは云ふ迄もなく理論に於て明に又實地に於て適用せられつゝあるを見ても明である、故に余

は乾燥法の原理としては、專ら此方法に於て基本とす可きものに付き以下少しく細論せうと思ふ。

眞空乾燥の項に於て空氣は水蒸汽發散の速度を減却する障害物であることを記した、今吾人は乾燥の目的に向て何故に此障害物を使用するか、且之を使用するを以て尤も自然に適へる良法であるとなすのであるか言迄もなく空氣は吾人乾燥の目的に對して上記のやうな僅少の障害をするけれども、其反面に於ては次に記載するやうな多大の利益を與ふるのである、多大の利益とは何である、即ち眞空乾燥法に於て甚だ複雜の裝置を要す可き排濕の作用が此空氣を使用することによりて甚だ輕量に、且又被乾燥物より濕氣を飛散せしむるに於て重要の資本たる熱量を被乾物に交附せしむるに於て空氣に及ぶ可き至便のものはない、即ち大氣は地上に充滿し、水蒸汽と密接の關係を有し價を拂ふの必要ないものである、之を捨て之を除去して乾燥の目的を果さうとするやうのことは愚の至りと云はねばならぬ、而して吾人は此方法の實驗に於て知れるやうに、空氣に適量の熱を交附して之を熱空氣となし、之を乾燥室內に送り被乾燥物に觸れしめて先づ之れを熱し、其結果某量の水分を發散せしめ、茲に生じたる含濕空氣は通風作用によりて新陳代謝せしめ、乾燥の目的を達する

第壹表

各溫度に於ける空氣の容積及密度及壓力表

溫度	大氣壓力即一平方吋面上に14.7封度の壓力を有する空氣一封度の容積 華氏62°を單位とす		大氣壓の空氣の一立方呎の密度及重さ	一定容積を有する空氣一定量の有する壓力華氏62°に於ける大氣壓を單位とす	
華氏	立方呎	比較容積	封度	一平方吋面上封度	比較壓力
0°	11.583	.881	.086331	12.96	.881
32°	12.387	.943	.080728	13·86	.943
40°	12.586	.958	.079439	14.08	.958
50°	12.840	.977	.077884	14.36	.977
62°	13.141	1.000	.076097	14.70	1.000
70°	13.342	1.015	.074950	14.92	1.015
80°	13.593	1.034	.073565	15.21	1.034
90°	13.845	1.054	.072230	15.49	1.054
100°	14.096	1.073	.070942	15.77	1.073
120°	14.592	1.111	.068500	16.33	1.111
140°	15.100	1.149	.066221	16.89	1.149
160°	15.603	1.187	.064084	17.50	1.187
180°	16.106	1.226	.062090	18.02	1.226
200°	16.606	1·264	.060210	18.58	1.264
210°	16.860	1.283	.059313	18.86	1.283
212°	16.910	1.287	.059135	18.92	1.287
220°	17.111	1.302	.058442	19.14	1.302
230°	17.362	1.321	.057596	19.42	1.321
240°	17.612	1.340	.056774	19.70	1.340
250°	17.865	1.359	.055975	19.98	1.359
260°	18.116	1.379	.055200	20.27	1.379
270°	18.367	1.398	.054444	20.55	1.398
280°	18.621	1.417	.053710	20.83	1.417
290°	18.870	1·436	.052994	21.11	1.436
200°	19.121	1.455	.052297	21.39	1.455
320°	19.624	1.493	.050959	21.95	1.493
340°	20.126	1.532	.0496[illegible]6	22.51	1.532
360°	20.631	1.570	.048476	23.08	1.570
380°	21.131	1.608	.047323	23.64	1.608
400°	21.634	1.646	.046223	24.20	1.646
425°	22.262	1.694	.044920	24.90	1.694
450°	22.890	1.742	.043686	25.61	1.742
475°	23.518	1.780	.042520	26.31	1.789
500°	24.146	1.837	.041414	27.01	1.837
525°	24.775	1.885	.040364	27.71	1.885
550°	25.403	1.933	.039365	28.42	1.933
575°	26.131	1.981	.038415	29.12	1.981
600°	26.659	2.029	.047510	29.82	2.029

のである、然も其間空氣の膨張、收縮、熱の授受、水蒸汽の發散狀態、水蒸汽と空氣との張力關係、重量關係、混合物の性質其他諸般の物理的現象に付、頗る複雜な關係を有するから以下順を追て述べやう。

(A)單純なる空氣は如何なる性質を有するか

空氣は一般に知られて居るやうに、窒素と酸素の混合物（其他微量の瓦斯を混ず）であつて、溫度と壓力とにより容易に其形態を變化せぬもので「パアーマネント」瓦斯である事は明てある、是等の性質に付いては普通物理學に於て其一般は論じられて居るから、余は單に右(第一表)に掲ぐる表により相互の關係を示すこととしたのである。

此表によるときは吾人は公式を應用して煩雜なる計算をなすの必要なく、一目にして諸種の關係を知ることが出來る、例へば溫度百二十度の場合に一氣壓の空氣一封度の容積は何程であるかと云へば、直ちに立方呎の項に於て一四、五九二立方呎であることが解る、同時に同列に於て同溫同壓に於ける空氣一立方呎の密度即ち重量は、〇六八五封度であることが解る、猶同列に於て六十二度の空氣一氣壓一定容積のものを同容積に保ちて溫度を百二十度とせば其壓力一、六、三三封度となる事が知られる、且容積に於ても壓力に於ても六十二度の場合を單位とし、之に對する各溫度に於ける割合の比較表に於て表示せられてある、此表によりて見るときは六十二度に於ける一氣壓一定容積の空氣は六百度の高溫度に登つるも只僅かに略二倍の壓力となるに過ぎない、是れ空氣の「パアーマネント」瓦斯たる所以であつて、次に記する蒸汽即ち「ベエーポオワ」とは大に異なるところである。

(B)單純なる水蒸氣は如何なる性質を有するか

水蒸氣と空氣とは一定の溫度以上に於ては同じく氣體の形態を保ち、其性質相類するところがあつても、其根本的性質に於ては甚しく相異つて居る、即ち前にも記したるやうに空氣は Permanent Gases であつて水蒸氣は Vapoure である、故に空氣は之を液體となすには非常の高壓力と非常の低溫度とを要する、然るに水蒸汽は普通の溫度に於ては液體の狀態を保ち只熱と壓力との關係如何によりて其形態を變化して氣體となる、換言すれば水蒸汽といふものは熱と壓力とに對して其形態上に極めて變化を生じ易き氣體であるけれども空氣は極めて不變の瓦斯なりと知らねばならぬ、水蒸汽の一般性質に付ても普通物理學に於て概論せられてあるから之も又複雜な公式上の計算を省略して表を以て相互の關係を示さう。

次表は三十二度(華氏)より二百十二度迄の飽和水蒸汽の割合表で水蒸汽が單獨に場所を充たす場合の狀態である。

第二表

各溫度に於ける飽和蒸氣の壓力及全熱重量幷に容積表

溫度	一平方吋面上に加はる壓力	[illegible]の水から蒸發するに要する全熱の量	一立方呎の重量	水蒸氣一封度の容積
華氏	封度	華氏	封度	立方呎
32°	.089	1091.2	.031	3226
35°	.100	1092.1	.034	2941
40°	.122	1093.6	.041	2439
45°	.147	1095.1	.049	2041
50°	.178	1096.6	.056	1695
55°	.214	1098.2	.070	1429
60°	.254	1099.7	.082	1220
65°	.304	1101.2	.097	1031
70°	.360	1102.8	.114	877.2
75°	.427	1104.3	.134	746.3
80°	.503	1105.8	.156	641.0
85°	.592	1107.3	.182	549.5
90°	.693	1108.9	.212	471.7
95°	.809	1110.4	.245	408.2
100°	.842	1111.9	.283	353.4
105°	1.095	1113.4	.325	307.7
110°	1.267	1115.0	.373	268.1
115°	1.463	1116.5	.426	234.7
120°	1.685	1118.0	.488	204.9
125°	1.932	1119.5	.554	180.5
130°	2.215	1121.1	.630	158.7
135°	2.542	1122.6	.711	140.1
140°	2.979	1124.1	.806	124.1
145°	3.273	1125.6	.909	110.0
150°	3.708	1127.2	1.022	97.8
155°	4.193	1129.7	1.145	87.3
160°	4.731	1130.2	1.333	75.0
165°	5.327	1131.7	1.432	69.8
170°	5.985	1133.3	1.602	62.4
175°	6.708	1134.8	1.774	65.4
180°	7.511	1136.3	1.970	50.8
185°	8.375	1137.8	2.181	45.9
190°	9.335	1139.4	2.411	41.5
195°	10.385	1140.9	2.662	37.6
200°	11.526	1142.4	2.933	34.1
205°	12.770	1143.9	3.225	31.0
210°	14.126	1145.5	3.543	28.2
212°	14.700	1146.1	3.683	27.2

上表で見ると三十二度の溫度では僅かに、〇八九封度の壓力の外水蒸汽の存在を敍されないのに二百十二度の溫度に於ては一氣壓即ち一、四七封度の壓力に達する事が出來る即ち壓力に於て約百六拾倍餘となつたのを見るのである、然るに空氣では三十二度の空氣が貳百十貳度の溫度に上昇する事によつて同容積にては只僅かに一、四倍强となるに過ぎない、此對照に於ても空氣と水蒸汽とが如何に其性質に於て相異なるかを知り得らるゝ、而して此異なる點が後に論じやうとするところの乾燥室內を能ふだけ高溫度(被乾燥物を害せざる範圍)に高むる事の有利なる最大原因であるから、特に注意せられたい。

而して水蒸汽は或る眞空中でも、又た空氣中でも溫度に對應する一定の壓力を保持し得ることは眞空乾燥器の項で述べたやうに、且此事實に付いては先になつて關係的に表示するから、茲に詳論せないが次に至りて引用の必要があるて、是又注意を乞ふ次第である。

(C)空氣と飽和蒸氣との密度及容積の比較は如何

前項では各々單純な空氣及單純な水蒸汽に付き單獨に各溫度に對する容積密度壓力等の關係を表示し、且說明したけれども、次に此單純な空氣と單純な水蒸汽の各溫度に對する壓力重量容積等を比較對照するに都合の良いやうに第三表を掲げやう。

第參表

空氣及飽和蒸氣の密度及容積の比較表

一平方吋に加はる全壓力	温度	一立方呎の重さ及密度		一封度の容積		蒸氣と空氣の密度比
封度	華氏	空氣	蒸氣	空氣	蒸氣	空氣=1
		封度	封度	立方呎	立方呎	
1	102.1	.0048	.0030	208.01	330.36	.622
5	162.3	.0217	.0138	46.04	72.66	.635
10	193.3	.0414	.0264	24.17	37.84	.638
14.7	212.0	.0591	.0380	16.91	26.36	.643
20	228.0	.0786	.0507	12.72	19.72	.645
30	250.4	.1142	.0743	8.76	13.46	.651
40	267.3	.1487	.0974	6.73	10.27	.655
50	281.0	.1824	.1202	5.48	8.31	.659
60	292.7	.2155	.1425	4.64	7.01	.661
70	302.9	.2481	.1648	4.03	6.07	.664
80	312.0	.2802	.1869	3.57	5.35	.667
90	320.2	.3119	.2089	3.21	4.79	.670
100	327.9	.3432	.2307	2.91	4.33	.672
110	334.6	.3743	.2521	2.67	3.97	.673
120	341.1	.4051	.2738	2.17	3.65	.676
130	347.2	.4355	.2955	2.30	3.38	.678
140	352.9	.4657	.3162	2.15	3.16	.679
150	358.3	.4957	.3377	2.02	2.96	.681
160	363.4	.5235	.3590	1.90	2.79	.683
170	368.2	.5551	.3798	1.80	2.63	.684
180	372.9	.5844	.4009	1.71	2.49	.686
190	377.5	.6135	.4222	1.63	2.37	.688
200	381.7	.6425	.4431	1.56	2.26	.690
220	389.9	.7000	.4842	1.43	2.06	.692
240	397.5	.7569	.5248	1.32	1.90	.694
260	404.5	.8133	.5669	1.23	1.76	.697
280	411.2	.8691	.6081	1.15	1.64	.700
300	417.5	.9246	.6486	1.08	1.54	.702

上表で見ると同温同壓同容積の空氣と飽和蒸汽との密度を比較對照することが出來る、又同温同壓同重量に於ける空氣と飽和蒸汽との容積を比較することが出來る、亦同温同壓同容積に於ける密度の比は空氣を單位として飽和蒸氣の量に對する比を知り得らるゝのである、今之に因つて見ると同温同壓同容積の空氣と水蒸氣では空氣が常に重い、又同温同壓同重量に於ける空氣と水蒸汽では水蒸汽の容積が常に大きい、即ち空氣の密度は同温同壓にありては常に水蒸汽に勝つて居る換言すれば、空氣は水蒸汽よりも重き氣體である、此關係は後に乾燥室内氣流の狀態を説明するに必要な事項である。

（未完）

集芳

柞蠶は如何なる習性を有するか

通常會員 勧業模範場技手 長岡哲三

予は韓國水原勧業模範場に居て、去る三十九年以來柞蠶を試養し其習性等に就て聊か調査したのである、素より卑近のことではあるが錄して以て大方諸彥の敎を乞ひたいのである。

卵殼と脱皮殼を食するのは何が爲か

一、柞蠶は其孵化に當りて卵殼を食するものである、是れ家蠶其他の昆蟲に於ても見る處で怪むに足らないけれども柞蠶は又各眠時脱皮に際して必ずや己れの脱皮を食するものである、若し之を採り去りて食はしめなければ其發育は幾分遲るゝものゝやうである。

一、即ち蠶兒は脱皮後暫らく靜止し一時間乃至二時間半で先づ脱皮殼を食し、又靜止すること一時間乃至二時間後初めて食業することを常とするのである。

一、脱皮殼を食するは何の爲めであるか予輩は未だ之を詳にせないが之を食せしめぬ時は其發育が後れるのを見ても蓋し何等かの要求に出づるものであらう。

一、支那の蠶書にも亦脱皮殼を食することが書いてある、曰く「凡そ蠶出卵の時旋すれば必ず其殼の半を食ふ、毎眠時旋すれば必ず其蛻の半を食ふ、食はしめざれば則ち蠶弱く繭薄し云々」と、養蠶家は蠶兒の脱皮に際し、可成靜穩を計り、彼れの要求を充たさしむることが必要であることは勿論である。

柞蠶の發育經過はドーか

一、柞蠶の發育經過は春秋に依りて相同じくないのは勿論氣温の高低空氣中水分の多寡及飼料の良否に依つて甚しい長短を生ずるものである。

一、春蠶(第一化)では產卵後孵化するまでの日數は二週日乃至二十日以內を要するけれども秋蠶は十日內外である、孵化より結繭までの時日は氣候及飼料に大關係を有し年々相同じくないが春蠶では四十二三日乃至五十日秋蠶は三十七八日乃至四十五六日を要するのである、而して春蠶は其初齡に長く齡を重ぬるに從て比較的短きも秋蠶は之に反して居る、蓋し氣候上當然のことである、結繭後發蛾に至るまでの日數は春蠶にありては約二十日を要し秋蠶は越年して翌春に至るものである。

一、韓國水原地方では冬期寒冷の處に種繭を置くときは春蠶の發蛾は五月中旬であつて、六月上旬孵化し、七月下

旬結繭する、秋蠶は八月上中旬孵化して十月上旬結繭するのである。

一、只一頭の蠶兒に就きて之を見るに斯の如く長時日を要せぬけれども、柞蠶は家蠶の如く發育斉一でない、殊に専ら自然の氣候に支配せらるゝものであるから、同日に孵化放養したものも結繭までの間に二三日多きは七日の差を生ずること稀でない、從つて全部の蠶兒に就て其經過を調査するときは甚だ長き日數を要するものゝ如く見ゆるものである。

一、韓國水原地方にありては冬季種繭を放任するときは前記の如く蠶兒の發生は遲くて櫟、槲、楢等の發芽伸長に伴はない、常に老硬の飼葉に養はるゝから其發育は良好でないばかりでなく延ひて秋蠶の發生を遲延せしめ其末期に至る寒冷結霜等に遭遇し徒らに長き日數を要して甚だ不經濟であるばかりでなく、豐作を期し難いものである。

一、即ち同地方にありては秋蠶は九月末日までに全部の結繭をなさしむるやうに發生せしむるのが上乘としてある是よりも温暖な地方では其發生が遲れても妨げないが寒冷なる地方では尙早くなければならぬ、而して發生を早からしむるには冬期種繭を温暖なる場處に貯へ置き翌春三四週間之に加温して五月上旬發蛾せしめねばならぬ。但し冬季間温暖に過ぎたる場所に置くときは不時發生を見ることがある、某韓人が常に温度高き温度室內に種繭を置けるに十二月末に至りて終に發蛾を見た實例がある是等は寒冷の場所に移して發生を抑制し得るも終に被害を免れないであらう、寧ろ製絲用に供する方が良い。

柞蠶は如何なる物を好み如何なる物を忌むであらう

一、柞蠶は連日晴天であつて乾燥せる氣候に養はるゝ時は食慾不振となり、皮膚稍々汚色を呈し、其緊張力を減し爭ふて新葉を求め、若し己れの存ずる養樹に新葉のない時は地面に下りて新葉を求むるものゝ如く見ゆるのである。

一、此の際降雨に逢ふときは蠶兒動搖することなく、食慾旺盛となり舉動活潑で皮膚緊張し、且つ其色鮮麗となり、壯觀を呈するに至るものである、而して降雨數日に亘るも蠶兒は更に之を厭ふことなく發育佳良のものである是から見れば柞蠶は適當の水分を要求するものであるといふことが知られる。

一、柞蠶は風を忌み其強きときは之を避け葉裏に廻り且つ食葉を止むることがあるけれども、長時間に亘れば食葉を繼續するものである、而して十米以下の風又は普通の雨では蠶兒は決して落下することはない、時として落下することがあつても、是れ抵抗力弱き爲めではなくて偶々蠶兒が脚を上げ、或は葉の上に乘りたるとき不意に側面より風又は雨滴を受け脫せらるゝに因るものである、又柞蠶は烈しき夕陽を忌むやうである。

一、柞蠶の發育は飼養の良否に大なる關係を有すること勿論であつて飼葉は濃綠を呈し、肉厚くして柔軟なのを貴び黄味を帶び堅硬にして肉薄きものを忌むのである。

一、試みに深綠にして肉厚き良葉と淡黄であつて肉薄き不良葉とを分析したが其主要成分は左の如き數を示した。

	眞葉	不眞葉
水分	五九、六八一%	四四、〇九五%
全窒素	一、〇二五	〇、六九〇
粗纖維	八、九三三	一三、四五八
粗蛋白質	六、四〇八	四、三一五
灰分	〇、四九八	〇、七七四

備考 此分析 豐永博士指導の下に友人三閑茨明氏に依りて行はれたものである

一、即ち不良葉の窒素及蛋白質は良葉の二分一に及ばざるに纖維は頗る多く水分は甚だ少ない、蠶兒が嗜好せずして其發育の不良となるのは理論上爭ふべからざることである

一、又一は稚小にして良葉を有するもの、一は喬木であつて不良葉を有せるものに、第五齡三日目の蠶兒各五十頭(其全體量同一なるもの)を別々に飼養せるに左の如き成績を得たのである。

	放養蠶數	結繭蠶數	減蠶數	結繭平均一頭の體量
眞葉區	五〇頭	四一頭	九頭	四、八五匁
不眞葉區	五〇	二二	二八	三、〇〇

一、前表中減蠶は飼葉の不良を忌みて他に良葉を求めんが爲不知不識の間に移轉し、或は衰弱死に至れるものである、壯齡の蠶兒を短時間試養したのみで斯の如く成績不良である、柞蠶を養ふものは必ず第一に飼料に注意せなければならぬ。(未完)

蠶界の寵兒たるべき時機

特別會員 代永金太郎

死すべき時に死せざれば死するに勝る恥あらむとは建國以來吾大和民族の根本を養成し來つた確言であると云ふても差支あるまい、若し凝つて百練の鐵となるてふ武士的敎化が玆に在りとすれば、國家の消長を其双肩に荷ふて居る蠶絲業者が平時に服膺すべき確言がなけねばならぬ、余の考ふる處を以てすれば、夫れは「取るべき時に取らざれば取りしに勝る悔あらむ」と云ふ言葉が眞に言ひ盡して居るではあるまいかと思ふ。

抑も取るべき時ト取るべきもの!

とは何?、……時は今也、ものとは桑也:……然り時は今てある、機は得易くして而も失ひ易いものである、此機を見、時を失はぬことが處世上に於る眞の要決である、吾蠶絲業界に多年喧しい問題は何かと云ふたら恐らく桑園の改良問題であらう、而も此桑園を改良することは各自が認めて利益ありと信じ、亦早晩行はねばならぬ問題であるとは自覺して居る樣であるが、倚實際に立ち至ると各自が自覺し又信じて居る割合に實行せられて居らぬ、此點から觀察すれば吾れも人も認めては居るものゝ未だ倚其時機に到達せないからではあるまいか、否其時機は既に業に來て居るかも知れぬが事實種々の點からして行ふことが出來ぬのではあるまいかとも思はれ

るが然らぬ〜考へれば、實に生絲の前身とも云ふべき桑葉が粗惡であつて桑園の荒廢して居るのは蠶の生育する上から見ても土地利用の上から見ても不經濟不條理の踏てある、識者が用を繫るのも決して偶然ではなく、曾て或る西洋人は云ふた。

日本人の食物を改良したなら

夫れこそ、今より一倍も二倍も生産を爲し得るであらうと、之を直ちに取つて蠶兒に應用しても無駄の纍言ではあまいと思ふ、食料品即ち養成すべき原料の桑が巡くつて何て蠶が無事圓滿に育ち、何て美繭を營み得られやう、識者が桑園荒廢を難ずるも無理はない、無理はなくして而も行ひ難業者の側になれば、其の改良は有利なりと信じて而も行ひ難いのである、桑苗もはねばならぬし、勞力も餘分に要する肥料其他に於ても多少餘分の準備はせねばならぬ、左らばとて之等の資金が直に回收するものでないから、切り詰めた農家の經濟として末の百より今五十主義を取るのは餘義ない若しも之等を測らずして無暗に桑園改良を强ゆるならば食はずして鞭けと馬に可能也とするものではない、唯に時機を得ると否との問題であつて其改良の必要て若も爲さねばならぬことは改めて申すまでもない。

然らば時機は何時か

今である即ち今である、眞に桑園を改良すべき天與の時機は今であるではないか……何故なれば、第一食料品たる米は安い、第二勞力は比較的高くない第三桑苗は極めて安い、此の好機が又とあらうか、時機は人爲を以て為すも再び廻り來るものでないことは、若棄たる某が說明する迄もないと信ずる、然らば今迄期待するともなく時機其ものを期待して居つた好機に際會したのではないか、然だ即ち取るべき時機とは……聞くならく、本年は一般に桑葉は安いと云ふてはないか、此の桑葉の安い時機に人の桑を目當にして自分の桑園を改良し收獲を減ずる人が一時に多數であるならば、其の反對に桑葉は必ず騰貴すべきは明かであるから、其の改良方法に就ては攻究すべきであが兎に角に本年の收獲を減ぜずして改良し得る樣に土地に依つて工夫して貰へば夫てよい、其

方法よりも時機

が改植を爲すに適し而も此時機を逸するならば再び斯る時機に遭遇することが難てあると云ふことを、諸君に認めて貰ひばよいのである、時機を逸せずして好く利用し提へ得たものが、成功者である、一面から見れば之が運命の寵兒である、今此機を逸せず改植したものが、即ち運命の寵兒となることは、蓋し好き時機は將來必ずまた來るべく、又若し徒に大誤ないであらう、然らば今改植せる桑の全盛時代が其時機に回り來ずとも來ないとは限らない、好く現在以上に結果を奏するとも來ない、好く現在以上に結果を奏する時代が來らずと假定するも土地の收獲を增す上に蠶

兒を健全に飼育し得るの得點は餘今乎として火を見より明である、何を苦んで袖手傍觀此好期を逸するを學ばんや……と信ずるのである、敢て余の眞意を披瀝して賢明なる諸君に賣したいのである。

（明治四十年八月一日印刷納本　同年八月五日發行）

品種改良と卵形又昔（承前）

埼玉農會農事試驗所技手　水野辰五郎

體質强弱の試驗は如何なる成績を示したるか

體質の强壯なるものは飼育容易であるから從て收繭實なるものであるが、之れに反して虛弱なるものは其飼育中些少の不適當な狀態にも抵抗する力の弱いもので、從て飼育困難なる譯で、稍ともすれば逆作の悲境を演ずることがある、如斯此體質强弱の關係は、蠶業經濟を支配する主要なる條件であるから、其體質は與ふべく丈け强壯なのを欲するのである、今去る四十年、各種體質の强弱關係を調査せんが爲め、給桑半減飼育（一回の給桑量を普通になし二回數を約半減せり即ち營養不足）及多湿育（給桑を增加し時々水を散布して且つ除沙の回數を減ずり）を以て、各種の之れ等不適當狀態に抵抗する力の强弱を比較し、而して飼育上の難易を判ずる資料とする爲に、試驗した成績を示せば左の如くである

（各種一匹起五百頭づゝを掃めり）

品種改良と卵形又昔

給桑半減育

品種名	飼育試驗頭數	上繭總數	總結繭頭數	減蠶數	結繭數	減蠶數
卵形又昔	五〇〇	三九五	四〇〇	一	三九五	五
小石丸	同	三九八	九八	二	三九六	二
青熟	同	三七二	三七二	一九	三五三	一九
又昔	同	三七六	三三七	六	三三一	六
白龍	同	四〇三	一九二	一六三	一九二	一六三
白玉	同	四〇〇	四〇〇	二	四〇〇	二
長葉又昔	同	二五八	三〇三	一九七	二五八	七

多湿育

品種名	飼育試驗頭數	上繭總數	總結繭頭數	減蠶數	結繭數	減蠶數	識別數
卵形又昔	五〇〇	三九九	四五六	四	四五六	四	三
小石丸	同	三八七	四五四	四	四四一	五九	六
青熟	同	三七二	四四七	五三	三五	五九	二
又昔	同	三七六	四六一	二九	一四	一	七
白龍	同	四〇三	四八六	一四	四八六	一四	七
白玉	同	四〇八	四一六	八四			
長葉又昔	同	三六五					

以上給桑半減育區に於ける成績は、青熟、白玉、小石丸、白龍、卵形又昔、又昔、長葉又昔等の順序である、卵形又昔は其成績優等であるとは言へぬが小石丸白龍の類とは伯仲の間である。

多湿育の成績を見るに、白玉、白龍、卵形又昔、小石丸、又昔、青熟、長葉又昔の順序であつて卵形又昔は白玉に次で優等な方である。

兩成績を通覽するに、普通に飼育されつゝある品種に比較するに、卵形又昔は、其體質小石丸白龍青熟等に遜色なく、勿

論之れ等一ケ年の試驗成績は、其強弱を判定するの資格がないが尚從來の經驗に訴ふれば、良種（豐美の繭を作る品種）必ずしも虚弱ならずで豐美の繭を作る品種にして且つ强壯なものがある、卵形又昔の如き其一例であるが、兎に角此品種と强弱關係は、或特別なる品種、例令ば外國種とか又本邦種の一二の例外を除けば、其差極めて些少なるもので、寧ろ品種と其強弱關係よりか、其製造したる蠶種の善惡が頗る與かつて力あるものなれば、善良なる蠶種を製造或は購求することに注意することが肝要な勉である。

七ケ年平均の收繭高はドーか

其量の多少、及び品質の良否は、養蠶經濟の繋る丶所であるから、品種の優劣判定上勿論重きを置き、之れを調査すべきものであるが、然しながら唯單に收繭量の多きを以て、直に之れ良種なり、經濟的品種なりと、判斷する通弊を去らなければならぬ、蟻量一匁に對し四貫目の收繭あり、五貫目の收繭ありなど、若しくは七分附一枚の蠶種で、十貫目二十貫目の收繭を得た所が、之れに要せる桑葉が果して經濟的であつたか、否やは疑問である、蟻量に對する收繭も多く、且つ桑葉も比較的經濟ならば、之れ優良なる品種であるが、若し然らずに、收繭も多いが桑葉を要する割合も又一層多いものならば、之れは決して經濟的良品種でない、例へ其收繭が量に於て、他種に一歩を讓るにしても、夫れに要せる桑葉少なければ、寧ろ經濟的の良種と云はねばならぬ、夫れ收繭の多きを望まば蟻量を比較的多く掃立てればよい話で、其主眼は桑葉量に對する收繭多いもので、且つ蓬繭の品質優良なるものでなければ、良品種たるの資格がない、左に七ケ年平均蟻量一匁に對する收繭成績並に給桑百貫に對する收繭成績を上げやう。

七ケ年平均收繭表（對蟻量一匁）

種別＼目標	上繭 重量	上繭 容量	中繭 重量	中繭 容量	下繭 重量	下繭 容量	玉繭 重量	玉繭 容量	合計 重量	合計 容量
卵形又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
小石丸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
青熟	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白龍	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白玉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長果又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

給桑百貫に對する收繭表

種別＼目標	上繭 重量	上繭 容量	中繭 重量	中繭 容量	下繭 重量	下繭 容量	玉繭 重量	玉繭 容量	合計 重量	合計 容量
卵形又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
小石丸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
青熟	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白龍	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白玉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長果又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

前表示す所の如く、蟻量一匁に對する收繭に於ても又給桑

量に對する收繭量に於ても他種に一歩をも讓つて居らぬを見たならば蓋し卵形又昔は其收量に於て實に經濟的品種たるの資格があるてあらう。

繭質試驗の成績はドーか

養蠶者は多額の收繭を得ば事足れり的の考へて、其繭質には殆ど無頓着である、蓋し普通養蠶家は其繭質の如何には直接の關係が薄いものであるから、唯外見の豐美を以て之れ良しと考ふるものが多い、勿論外見上の如何によりて其評價を定むるけれども繭質の優良なるものを供給して、製絲家の經濟を豐にするは、自然自家の繭價を高むるの所以なれば其絲質の如何は、品種の優劣を定むる上に於て頗る肝要なるもので、特に本邦蠶絲の如く、其改良を必要となすこと、前段に詳說した如くであれば、此繭質問題に關しては、充分重きを置いて查定せねばならぬことてある。

七ケ年平均絲質試驗（檢尺器 檢位衡は舊式による）

種別＼目標	一顆の絲長 最長	一顆の絲長 最短	一顆の絲長 平均	對四百回纎度 最太	對四百回纎度 最細	對四百回纎度 平均	對四百回 纎節	對四百回 切斷
卵形又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
小石丸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
青熟	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白龍	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白玉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長果又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

本邦絲の最大缺點たる類節の多きこと及び纎度の不均なることは其原繭の如何に關することの少なからざることは、既に說明せる所の如くである、而して今前表試驗の成績を見るに卵形又昔は其絲纎が細長であつて且つ類節の少いことは他種に見ることの出來ない所である、之れ本種特得の長所であつて、其繭形の在來種に異つて居る改良種たることも、其一因をなして居ることてあらう。從つて本種は本邦種の缺點を一掃し得る資格を備へて居るものと見て宜しい、尚繰絲試驗の成績を擧げんに

三ケ年平均繰絲試驗成績

種別＼目標	上繭一升 顆數	上繭一升 生繭重量	上繭一升 乾繭量	上繭一升 生絲量	上繭一升 屑物量	上繭一升 蛹量	對生繭百目生絲量	對蟻量一匁上繭生絲量	對給桑百貫上繭生絲量
卵形又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
小石丸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
青熟	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白龍	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
白玉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長果又昔	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

備考 最近三ケ年平均繰絲試驗成績であるが對蟻量一匁上繭絲量及び對給桑百貫上絲量は七ケ年平均收繭より割出したものである

絲量の多少は養蠶經濟の繋る丶所であつて、蓋し蠶業の目的も可成多くの絲を比較的少費用にて得んとするに過ぬので從て充分重きを置き、絲量の豐富なる品種を撰擇するの要もあるが、今前表を見るに生繭百目量に對する絲量は卵形又

品種改良と卵形又昔

昔より最も多く、白玉小石と丸之れに次ぐ釈迦である、一升の繭量に於ては、白玉小石丸に一歩を譲ると雖も、滴形の小なるものは、一升の粒数多く従て重量も多いから、其絲量の多きことも當然であつて、直に以て絲量多き良種なりと判ずべきものでない、這は生繭百目に對する生絲量の多きものを以て、絲量多き良品種と見做すべきである。

諸成績を通覧すれば、卵形又昔は以上品種に於て、比較的優等である、勿論僅に七種の比較に過ぎぬが、這は當場飼育に際し、内國廿種、外國種七種を同育し、其内に於て比較的優良なるものを撰探し、繼續飼育比較したものであるから、先づ以て之れ等七種中の巨擘は、品種中の優良なるものと推断して差あるまい、茲に至つて、

卵形又昔は本邦品種中の最良種

であると謂はんと欲するものである、以上不肖を省りみず、品種撰擇して、此重大なる問題に向つて解決的に論究を試みたるが如きは、勿論牛を割くに雞刀を以てするの若き、一笑を甘受する積りではあるが、然しながら確信は徒らに之れを抑むるの情に忍びぬので、茲に卵形又昔を無會した次第である、日進月歩の今日、勿論本種以上の良種を改良撰擇することの近きにあるは、疑ふことの出来ぬ、又卵形又昔に對しても、尚今後の改良に待つ所もあり、勿論一層の改良に盡す積りではあるが、目下の本邦品種中に於て、卵形又昔は比較的優良なるものであることは、世人の認容する所である、但茲に贅言し置くことを憚からぬのである、僅むらくは當業者諸士よ、徒に其繭形在來種に異なる故を以て、排斥することなく、而して本種の飼育を試みられんことを、切に御願ひするのである、且つ今後の改良方針に對しては前記する所、又以上述べたる其參考の資料たることを得は幸である。（大尾）

明治初年の蚕業界に於ける傑物として今名噴々たりし河瀬氏は今の開散の身となりて蓐心建國以來の大恢たる配偶女子の教育振興すべく努力されてある編者氏を訪問するの餘り側品川なる仲準園に訪ひ四方山の談話を交換したる一編を掲するものは期ち氏が談話の原稿である

予は蠶絲業に就て如何なる奬勵を爲したるか

河瀬秀治

民業の發展

明治維新と共に開國の國是を確定せられましたる上は外國との比較上何よりも先づ第一に國民の產業を發達させねばならぬと云ふのは私の持論でありましたゆえ廢藩置縣に際し印幡縣令として下總國に至り地方の實況視察いたしますと從前から猿島茶などと唱へ製茶は有名な產物であります、ゆえ是に奮いたし茶園なども他々字治地方から取り寄せ種々の方法手段を以て當業者を奬勵いたし恰も縣是の如くに取扱ひましたる夫ゆえ產額も增加し又品質も改良せられ、自然輸出上下總茶として屈指せらるゝ樣になりました、又一面には舊幕時代新に際し徳川將府の廢亡と共に二百幾十年繁盛の舊江戸は一小金ヶ原などと唱へ管内に牧場野が深山ありましたが、維變して頓に衰亡に向ひ無產の窮民を出しました、此處分は當時の一問題で其方法として此原野を東京富豪の市民に分割して其間に懸レ窮民を引受けさせる事になりましたが、其事は中々の困難で富豪家窮民共に相互ひに苦情百出の折柄廢藩置縣となり、該原野は總て印幡縣の所轄に歸せられましたから、前後策として種々請究もいたし、其當時開拓使屬の米國人ケプロン氏をも招待いたし研究いたした事であります、其後勧業寮にて牧羊場等に改造せられましたのも此原野であります。

上武地方に於ける製絲の改良

明治六年當時の大藏大輔井上馨君の慫慂に依り更に移りまして群馬人間南縣の整理をする事になりましたが、此地方は下總とは異なり、養蠶製絲の盛んな地方であります、併し其頃は一般座繰製絲で所謂提け絲造りの時代で品位とも極めて幼稚なものであります、然るに前橋の大波りと申す所に西洋式の器械製絲所が設けられてあります、是は舊藩の士族人に達水堅書と申す人があり此人が伊太利人を雇ひ設置いたしたものゆえ、同氏に就き親しく意見を承ります、製絲の改良は增額は國家富强の一大急務なることを自信いたし、其當時遠水氏は福島縣に招待せられて居りました

たが、強て招き歸し、事々質問して專ら製絲の改良に勉めました、其一手段としては當時官金にもせられず、民有にも非ざる一種の剩餘金の如きものがありまして、其處分方法は私に一任せられましたから此金を確實なる有志のものに貸し渡し、西洋式の製絲工場を水沼村伊勢崎村等に創設せしめ、是れ等を模範として着々改良に向はしめ、又一方には蠶種養蠶の改良等何くれとなく該業の發達上には可成丈ケ世話もいたし、桑園の開拓等も隨分奬勵いたしました。

生絲の直輸出

其後明治七年に內務省が新設せられ、私は同省の大丞に任ぜられ續て勸業寮權頭となりました、當時の內務卿は有名な大久保利通公で勸業には頗る熱心の御方であります、其內務省で警保寮と勸業寮とが一等寮で內務省の業務として最も重要な事務に任ずる寮を一等とせられたのであります、丁度其頃米國紐育府の領事富田鐵之助氏が歸朝いたしましたから日本物產の米國に需要せらるゝ方法をいろ〳〵講究いたしました結果要するに米國市場商業の實況に通曉する人物を遣るを以て最も第一着手となすの外には手段なき事を決しましたから直に橫濱税關に勤務の神鞭知常氏を勸業寮に採用いたし、一と通り內地の製絲工場なども實視いたさせ、生絲は勿論其他種々の見本品を携帶して米國に出かけました、而して米國では改良製絲を見せましても、見るもの〳〵是れは日本絲ではない、或は伊太利又は其他のものならん、日本では此樣な善良な生絲は出來ぬはづであると云ふので取り合はなかつた、併し夫れなれば試みに注文してくれよと云ふて、其通りの生絲を送致いたしましたので、米國人も始めて信用いたしくりかへし〳〵茲に輸送を重ねましたのが、抑日本生絲直輸出業の始まりのやうに思ひます、又勸業寮に於きましては僅少ながら、試驗費と云ふ課目の金がありましたから、其金にて試賣品と唱へ內地の改良生絲を買ひ上げ、在米國の神鞭氏に送り、而して最初買ひ上げ代金より高價にして利益を生ずる時は運賃其他一切の精算書を付して元の賣主へ其利益を附與したので、其當時米國直輸出が橫濱賣に比し少なからぬ利益あることが分りましたので、いよ〳〵改良を勸め直輸出を企てることになりました、一時有名でありました佐野理八氏の娘印の類の如きも要するに米國市場に適應する樣に改善いたしたものに外ならぬのであります、斯の如き行爲は今日より見ますれば如何にも不體裁不可思議なるが如き觀もありますれど此直輸出をなし購求者の實況に應じ生絲の改良に勸めました事は改良上著しき効果を顯し一面には橫濱にて外國人の一手のみに依り販賣せられました生絲の商權を幾分か本邦人の手に收め彼れが專橫を恣にすることの出來なくなりましたのも此手段に基因したことであります。

正金銀行設立の基因

前にも申しました直輸出の利益は一に外國へ販賣する物品（即ち生絲の類）の彼地の市場に適するや否の要點を探知し、改良の方針を定むるの利益二に從前橫濱に限ぎられ外國人の掌裏に握ぎられてありし商權を本邦人の手に收むるが故に價格上彼れか專橫を許さざるの利益是れ等は單に商工業上の關係でありますが、猶其上へ本邦の經濟上には又更に偉大なる利益のあることです、何となれば日本內地にては紙幣を以て物品を買上げ外國にては其賣代價を正金銀にて回收することでありますから直接間接に種々の便益のあることゆゑ、漸々盛大に赴き中々勸業寮の試驗費位の少額ではやり切れなくなりまして終に大藏省の準備から支出せらるゝことになり、大藏省にては繰り返し〳〵運轉する中に自然と紙幣が正金銀に交換せらるゝ都合でありました然るに此事業の盛大に赴くに隨ひ一の銀行を橫濱に設立し、直輸出に對する海外荷爲替の業務に當らしめ、又從前海外爲替の爲め外國銀行の專恣を蒙り、幾多の損害と困難とを除却するの一路を爲し、如之紙幣の下落は畢竟不換紙幣の弊害に外ならず果して然れば橫濱に正貨充實の一銀行を設くるは即ち紙幣の下落を救護するの一方便なりとの論もあり、旁終に今の正金銀行を設立せられたるもので其發起の基因は多少外國直輸の試賣品にありしものの如くであります。

右の外直輸出業の發展に就きましては其當時大藏省の財政顧問とでも云ふべき米國人ウリヤムス氏の歸國に際しまして同氏建言の趣もあり、英國倫敦府に日本物品の販賣を試みることになり、又清國方面にも直輸出業に着手せるの場合勸業の一寮におきまして日々に繁雜を增加し、且機敏を要する海外貿易の事業等農工商の三業を一括し殊に大久保卿の鋭意熱心なる重大の事務に對し不肖其任に堪へざるの恐れも少なからず、種々上申の上、明治九年勸業寮を二分せられ、一を勸農局として今の松方侯爵是れが局長となり、一を勸商局として私が局長を命ぜられ專ら海外販賣の業務に當り清國へも派出いたし又歐米兩洲へも夢のやうな巡回をいたしました、內務省創立以來の勸業の精神は明治十一年大久保卿の變死と共に殉死してしまいました、實に千歳の遺憾とは此事であります。

信州小縣郡製絲所の風穴全景

明治十四年退官後前にもおはないたしました、水堅曹氏等の發起に成りました生絲直輸出專業の同伸會社なるものが橫濱に設けられてありました、然るに速水氏は富岡製絲所の所長として官吏になりまして民業に關與することは出來なくなりまして、已事を得ず同氏の後任者として同社の長となり在官中と同じく生絲の改良直輸出の事業に聊か微力を盡しました位の事で別段御はなし致す程の事はありませんが兎角生絲及製茶の二業に

は輯録せられまして明治十六年には農務局より蠶絲并に製茶の儀に付諮問いたし度儀云々の照會まありまして、度々同局へ出頭いたし種々協議もいたしました、今の茶業組合なるものも其當時設立いたしたものであります。

聖德太子の遺教

私も長き年月製絲其他專ら物産の業に務めたが、最早稀古の歳も越え先きの短き身で熟々前後を考へますと、兎角人心が腐廢しては假令形式及組織又は物質は完備せられても、少しも信頼することは出來ませぬ、若し今日の如き狀態風潮にして人心は益々浮薄に風俗は益々奢侈に走り社會には賄賂的醜行の風聞絶へず、又會社銀行の重役には無責任に乗じて甚だしき狀態にて之れが趨勢に任せましたならば、彼の西洋一般に嫌悪せらるゝ、猶太人と撰ぶことのなきやうになりましてはまいか、世界の紳士に信用せられ共に〳〵公私の事業を繁盛することが出來ようやうになりはしませぬか、極端を云へば學識智能も國を賣り、君父に危害を與へるの具となりましませぬか、所謂人心是れ危く道心是れ微なりとは、聖德太子は先づ第一に精神界の開發に基礎として輕重前後を誤らず先進國の文明を適宜に採用せられ、日本文明の中興を高唱されまして、大和民俗の今日の精神既に衰ふらくは太子の遺教與て力あることと思はれます、彼の道實公は和魂洋才と云ふ意味の方針で日本文明を養成し、聊かにては和魂洋才と云ふ意味の方針で日本文明を養成し、聊か

御國恩の萬分一に報じたいと夫のみ專心從事してをります。

林式乾燥器は如何にして發明せられしか

林庫次郎

十年一日の如く奮勵して生繭乾燥器の爲に全力を傾注せる氏は我蠶絲界に投ずべからざる功勞者である吾重鎮中の一人である氏が乾燥器に於ける經歷の一端を聊か左に錄するものは即ち是れ……

製作の動機は御話しから

私は十數年前より蠶絲業器械の製作に從事して居りました故、蠶絲業家諸氏とは常に接近致して斯業上の御話を伺ひますから、自然道の研究に趣味を持つことになりました、然るに今より十年前識者の御話に日本の生絲は伊佛產に比し繭の解舒の不良なる爲絲量を減じ絲質を損じ且つ多額の生產費を要するが、單竟是れは生繭氣候風土の然らしむる處にして有る外途がない、若し此乾燥方法にして完全なる器械の發見する外途がない、故に之を救濟するを完全に乾燥する方法を發明を見るに至らば必ず伊佛同樣の生絲を造り得て國家に莫大の利益を與へるものと有ると云ふ事で有りました、私も此説を聞きまして大に感じまして、生絲の改良は目下我國の一位を占め、之が國家經濟の消長に關する一大問題迫て有る、宜しく益々此問題を研究し是非有効なる器械の發明を爲さむと苦心しました。

天の賜……製作の御命を拜す

折柄天の賜とや、幸ひに東京蠶業講習所齋藤講師の故計に係る生繭乾燥器の製作を命ぜられ、細心注意して製作に掛り居りましたが、如何と氣遣て居りましたが、其結果は此從前の乾燥法の弊害と通風作用の不良なる爲めに、天覽の好成績で光澤の艷麗は勿論解舒の良好なる爲めに、大和民俗の今日の精神既に衰ふらくは太子の遺教與て力あることと思はれます、彼の道實公は和魂洋才と云ふ意味の方針で日本文明を養成し、聊かにては和魂洋才と云ふ意味の方針で日本文明を養成し、聊か

林庫次郎君

つたので有りますから、何れも繭を煮ると同樣なる爲め、護謨質を固着せしめ、解舒を不良ならしめたので有ります、私は此從前の乾燥法の弊害と通風作用の不良なる爲めに、天覽の好成績で本邦生繭乾燥の改良を遂行せやうと心期しました、然るに此時一方では此蠶業界に暗雲が生ずるの爲め、爭ふて之を模造製作して、通風作用は密閉式と異りて多量の熱を要するが爲め猛烈に焚火をしまして、其結果微塵が焔解しまして其血種々の故障が出來まして爲めに火災が頻々と各地に起りまして遂に通風式は到底實用に適せざる者であるとの世評を招くに至りました。

議論の沸騰二百度

上

此に於て蒸汽論が沸騰しまして遂に蒸汽式を採用することになりましたが併しながら一時の流行熱に終りました、何故なれば蒸汽式は熱量不足の爲め自然密閉主義に近くなりまして充分の通風は由來ませんから、光澤解舒が不良に陥りまして有ります、右の樣に火力通風式に劣る事が事實に顯はれたから、一時非常に攻撃を受けましたが不思議にも、私の考は一ヶ所も故障が有りません、之は全くて何れも一時の發熱を防ぐに止まり當時稍進んだ者と申しました火室の内に長時間密閉して乾燥せしむるに過ぎなかけて據付ましたものは、其の欠點を補ふ爲めに、其他の數を少くしデニールの不揃其他の障害を悉く除却して生產費は半分で足ることとなり、絲量は多いと云ふ結果であつたから忽ち蠶業界を驚動し、輿論は旋然として乾燥改良の有益になりました。

あなありがたや好結果

斯樣に私の製作しました講習所の乾燥器が成効致しました原因は何れに有りやと云へば、一點に外なりません、即ち從前は天日乾燥とか又は蒸殺、燻蒸殺等に比して通風作用の爲めに、乾燥改良の有益にして大に私も一層奮勵致しました結果が今日の林式乾燥器を成効する動機となつたのであります。

其意味を解釋して一枚の煉瓦の積立一本の「ボールド」の使用も忽にせず、慎重なる注意を加へ、外からぬので有ります、然るに世間で此結果を攻撃して今日での利益ある乾燥器の改良を限止するは實に遺憾で有るが、翻も世間の模造者は如何な欠點から火災を起すか、此点欠点を調査せねばなりぬと思ふて充分精査を遂げ、夢寐の間にも此点欠点の改良に奮心しまして漸く鐵管の爆解伸縮及火焚口の築造設置等に至るまで安全の方法を發明して特許を受けました。

裡體となりて氣流を檢す

而して一方蠶業界を見ますれば乾燥改良の聲頻りしきに逐れ嚴一械の發明は續々出まして其數幾十種と云ふに至りました之れ皆一攫千金を夢み爭ふて時大の廣告を爲し當業者として其撰擇に迷はしめました、併し此幾十種の器械は一二年を經過する内に雲散霧消して跡を收めました、私は此混戰中に有つて拾年一日の如く所信を守り時流を超はず一意專心器械の改良に苦心の結果安らかく眠ることを得なかつたのは殆んど常時でありました或は數日に亙り徹夜したる事などは珍しくは御座いません而して或時は火夫となりて焚火の試驗をし、或時は百八十度以上の室内に裸體で入りて氣流の關係を調査する等事々物々實驗的に考究を重ねて實に千辛萬苦を嘗ました、其結果熱量の不足を感ずるに付て傳熱板裝置を發明して同一の燃料で地一般に熱量を得る室内に侵入する水分の弊害が大なるを考め煙風裝置を以て熱氣攪拌の方法を發明し均一を計る爲め煙風裝置を以て防濕裝置を工夫しました乾燥の特許を得ました、斯樣に私しは一日も向上的進歩を怠りませんで業務に限して居ります、從て其旁若も安しく御座いません、然るに世間で此結果を攻撃して今日での利益ある乾燥器の改良を限止するは實に遺憾で有るが、翻も世間の模造者は如何な欠點から火災を起すか、此点欠点を調査せねばなりぬと思ふて充分精査を遂げ、夢寐の間にも此点欠点の改良に奮心しまして漸く鐵管の爆解伸縮及火焚口の築造設置等に至るまで安全の方法を發明して特許を受けました。

桑園の改良は如何にして爲すべきか

（承前）

群馬縣老農　中山重兵衛

處が私の地方では桑のことには三十九年の大霜害……多分御承知でせうが、あの四月の大霜害で桑が殆ど枯て了つて再發芽も頗る危く思はれたので、丁度命なりと養蠶家は再發芽の見込をつけて夫れ當の蠶兒を泣の流して捨てたが、後の過ぎは間もなく芽を出した之れで飼育して見ると是は又意外の豐作でした、段々考へて見ると是は少し飼育したので人夫も雇はず賃用もかゝらず手が廻つた爲めであるといふことが分つた、そこで何でも養蠶といふものは分相應にやつた方が利益であるといふ。

を發見したのであります、夫れから話は少し又後戻りをしまして桑樹の伐採期ですが前にも申しましたとおり之は非常に大切なことで此伐採期を適當に致しますれば桑園を全く包囲に即ち冒頭を減さんでも桑の收穫といふものは或程度迄殖すことは出來るものであります、即ち發育期に十分成長させて年輪の十分定まつたところで伐れば一番よいのであるが、それでは何にもならぬから春期に伐らねばならぬ、春期四五月頃伐るのは前にもお話した通り新液を洩らすのであるから甚しく桑の生理を害する、ソレでも桑は至つて强な木でありますから其後て設ければ年の繁茂に差支へありませんがどうも多くの人は秋蠶に後を使ひたがつて困る、蠶を少し早く摘むのだから何ともないのであるが、秋蠶であると思はれるが、こゝが即ち大なる間違ひであります、

少しのケチが大きな損

となるのであります、御覽なさい春に伐つて又秋に摘んだ桑は翌年必ずロクな發育はするものでありませんが、私の經驗するところによりますと、此邊の手加減で優に

（第一）　德川農事組合第一製種乾燥庫

一反歩で六百貫の増收

があることは確實であります、私の桑畑に骨桑計り仕立てゝあるのですが、私の桑畑に骨桑計り仕立てゝあるのですが、私の蠶に伐て來ました結果桑樹が非常に衰弱して來ました、それはモー數年來春蠶に伐り夏秋蠶に伐て來ました結果桑樹が非常に衰弱して來ました、私は色々考へました末其春早く伐つて其樣子を見ようと思ひ、處がどうでせう、それが秋になつて見ますとスッカリ勢を恢復して來ました其傘が隱れるくらいとして傘をさしても其傘が隱れるくらいとして傘をさしても其傘が隱れる、之れは全く桑の生理に適つた處置をしたからであります、それから私は桑の中へ楮を作つたことがありましたが、御承知の通り楮といふものは桑に比べると非常に弱いもので桑樹と一處にして置きましては忽ち弱つて了いますけれども之を籔の中やなどに自然に放任されてある者はタトヘ切られても元氣良く生長する之は耕耘の爲に根を亂暴に切らず且つ年輪の定まつてから伐るからであります、左れば此等の道理を考へて桑の生理を害さぬやう、耕耘は勿論伐採期などには大に注意することが肝要であります、私はこれ

其の関係から一町歩の桑園を養蚕用と夏秋蠶用との二に分けて

八反の桑で一町歩以上の收穫

をすることが出來ると確信して居ります、どうするかと申しますと、先づ一町歩の桑園を八分二分又は七分三分に分けまして、八分二分ならば八反を養蚕用にし、二反を夏秋蠶用とするのです、そして双方とも專用といふことを厳守してよく精耕肥培を懇切に其秋蠶專用は悪明の後入年の定まつて淮液の上昇せぬ内に必ず伐採しますと儀に其八反歩の桑園から一町歩以上の收獲を得ることが出來る計りでなく、其貢は反つて宜く水大賃錢が輝濟であります故に桑園から見ますと非常の利益となるのです、之は其常で反別が少くなつて耕耘肥培が丁寧になると同時に濫損をやらぬから桑樹は其生理的本能を發揮して十分發育するそこで從來よりは少ない面積から多い收獲が得らるゝといふ結果になるのであります、之は私一家の私論ではありませぬドーか當業家諸君にも此邊について一層の御研究と實行とが願ひたいと思ふのであります。（大尾）

本邦製絲界の著宿

尾澤金左衛門君

夙に爲登絲の製造に從ふ

君は天保四年四月長野縣諏訪郡村字岡谷に生る、父を金藏と呼び君は其第二子なり、資性敏にして毅、人の意表に出でしもの頗る多かり、文久二年家を去りて別に尾澤家を起す、少額の資を以て自ら繭を買集め蠶屋を建て遂に松本地方や小諸地方に販賣し又諸國より移入せし繭を近村の婦女子を雇入れて製巻とし之を松本、小諸地方に商し常に早起晩露の冷きを踏んで出で晩歸月明を負ひて家門に入り、專心一意之に從事せり、然るに其製造せる「爲登絲」の製造に於ては當時夏期に於て父君と共に彼の有名なる「登絲」は從來の冬期に成功に努めたり。

然れども繭の需用せらるるは夏春の候のみ殊に於てか君は蛹を殺して之を京都、岐阜等へ送致し其達類の如きは一ヶ年僅に三四棚（一九貫目位）に過ぎざ

もきといへども、之れ實に今日の隆昌を齎したる第一歩にして天保年間に至ては一年十棚乃至二十棚の多數を製造するに至れり、然るに明治初年以後尾張、甲斐、三河、遠江地方より唐綿絲を低廉に送り來るに及び同綿絲に一大打撃を與へ双立の能はざらしむ、茲に於いて君は赤繭業を廢し專心意を製絲の事に傾くるに及べり、當時平野村内には二三の製絲工場ありて其製造に勉めたりと雖も今日より之を見れば殆んどいふに足らざるものなりき、此時に方り會々横濱の開港は一時に生絲需用の急増を來しより、君は早くも生絲事業の有望なるを察し、心を斯業に傾け益々其改善と發達とに意を注げり。

奇智賊を走らす

君繭を地方に行商せる頃なりき、一日松本より居村に歸へらんと欲して獅尾峠にかゝる、時に日既に沒して闇色前後を鎖し、從つて登れば從つて暗し、而かも坂路險悪にして風枝を鳴らし鬼氣襲ふが如し、夢に峠の絶頂に達せんとする時、突如雲突く如き巨漢五六名、手に〳〵得物を持ちて行手を遮し君を一睨して「ヤイ金を置いて行け」と大喝す、君其不意に驚き手にせる草鞋を落とし、之を拾はんとして靜に思へらく諏訪の〇〇には之等の連帯に出入する我其〇〇の者なることを裝ひて遁るべしと乃ち從容として草鞋を穿き替へ賊に謂つて曰く「汝等は之れ〇〇に出入する者に非ざるか、我は〇〇の者なり、酒落も亦遂ずや」と、賊中〇〇に出入するものありたりけん、互に相顧み君に其の秘密をば問はせんとするに能く賊と言ふ者は然れども君は之を捕へて無笹の内に浸しれども遂に兼理々として夫れ此の如く、奇智の發するところ往々にして此の如し、此事今も尾地方の好話柄として人口に膾炙しつゝあるも宜ならずや。

開明社の創立

明治五六年の頃にありても尚毎年鐵砲絲、六七棚を横濱に移出せしが、尚々明治六年小野組が器械製絲所を上諏訪に建つるに及び組しくして大悟るところあり乃ち明治九年從來の座繰を廢し、從つて登れば從つて暗し、而かも坂路險悪にして風枝を鳴らし鬼氣襲ふが如し、夢に峠の絶頂に達せんとする時、突如雲突く如き巨漢五六名、手に〳〵得物を持ちて行手を遮し君を一睨して「ヤイ金を置いて行け」と大喝す、君其不意に驚き手にせる草鞋を落とし、之を拾はんとして靜に思へらく諏訪の〇〇には之

農村共同組合組第二製種貯蔵庫（其二）

本邦製絲界の著宿尾澤金左衛門君

の諸氏を糾合して開明社を組織し、各自製造の生絲を持ち寄り、之を鑑別して一定の荷造となし、横濱へ向けて共同販賣をなせり。然るに其結果頗る良く市場の信用漸く厚からんとせしより、明治十七年に至り、開明社共同揚返場を新設し各工場より小枠の儘にて持ち寄る生絲を凡べて揚返へし、其品位を齊一ならしめ、之を横濱へ出し、益々其信用を厚うするに至れり。

　而して君又推されて社長となること一再にして止らず、常に企及すべからざる熱心を以て日夜社務に鞅掌せり、宜なる哉此令聲夙に遐近當業者の知るところとなり、其構造に倣ひて揚返場を設立するもの頻々として絶えざりしとや、君此間に處して全力を擧げて社運の隆昌と製絲の改善とに勉め、又能く團體の統一秩序を保ちて多數當業者の首班たるに至れり。

祝融の災君を奮勵せしむ

　君が不世出の勤勉と着實なる企畫とはよく其功を奏して社運日に隆昌に趨きしといへども、日月に盈蝕あり、好事魔多しの諺に洩れず明治十四年横濱市場の大不景氣に遭遇し、又た立つ能はざるに至りしに加へて明治十七年工場火を失し其の大半を烏有に歸せしむるに至り多大の打撃を蒙るに至りきと雖も固より難に遭ひて屈せず、事に處して誤らざる君更に意とせず、孟賁の勇を發して之れが善後の策を講じ、東奔西走辛うじて破産の危を免れ、自己所有の七十釜を運轉して纔に事業を繼續せり、君が天運や強かりしか天君が誠意を嘉せしか、社運日に順に昨に秋風落魄の感ありし社内は漸く今や春風駘蕩として衣袂に翻るゝが如き感を生ぜしめ、十九年に第一回の擴張をなし、翌二十年第二の擴張として百釜に增加し茲に全く基礎を强固にし爾來年と共に盛に赴き、今や武藏の熊谷、大宮、常陸の土浦、下總の千葉陸中の盛岡其他に數個の製絲場と二千餘人の工男工女とを有し、釜數合せて一千七百窯の多きに上り一ヶ年二百餘萬圓の巨額を產せり。

　嘗つて君を苦しめし災厄は却て成功の導火となり、遂に今日の隆昌を致せり、嗚呼天運も亦有りて存すべしといへども君が勇奮苦闘の結果にあらずして何ぞや。

公共事業

　君が善行を擧げて世の模範たらしめんには製絲業の外又各種の公共的事蹟をも說かざるべからず、君夙に地方交通の利便に意を致し、或は運輸に或は保險に地方利益の開發に力め殊に、明治十年地方運輸業の未だ發達せざるときに當り早く内國通運會社の代理店として南信一帶の運輸を宰し後帝國中牛馬會社を加へて愈々地方貨物の移轉を滑ならしめしのみならず、自ら率先して貨物の保險を附し以て其利益及安全なることを示しゝより地方の荷主漸く其利を覺り、故らに險惡の路を迂回し相率ゐて貨物を託し來り從來伊那安筑地方より他の路を經て横濱へ出しゝ貴重の貨物は幾何ならずして諏訪に吸收せらるゝに至れるが如き、或は明治二十七年中央線工事の完成に盡瘁して日露戰爭に際せしにも拘らず極力斡旋

遂に其落成を告げしめたるが如きは眞に稱するに餘あり、而して製絲業に關し其功績を表彰せられしもの頗る多しといへども、明治三十九年本會より金賞牌を贈りたるが如き、同年山梨縣外一府九縣聯合共進會が功勞賞を贈りたるが如き、明治四十一年賞勳局が勅定の綠綬褒章を賜ひたるが如きは其最も主なるものなり、此他第五回內國勸業博覽會に名譽銀賞牌を明治三十七年米國「セントルキス」萬國大博覽會に最高名譽金牌を受領したるを始めとし、博覽會共進會等より各種の賞與を受けたるもの殆ど枚擧に遑あらざるなり。

君が家庭及性行

　君に四男二女あり長男福太郎次男孫郎三男大六氏は不幸中道にして夭折し、四男良一氏其生家を繼ぎ、二女皆他へ嫁せり、又家に孫玄孫の二人あり、皆健にしてよく父祖の意を守る、君今古稀の壽を重て尙壯者の如も經營の事業を福太郎氏及孫郎氏に委ねて之を總攬し、益々斯業の發達を圖りつゝあり、君資性剛毅にして機敏躬行自ら持し、苟も己れ先づ之を實踐せざれば人に說かざるの風あり、君常に其子弟を誡めて曰く、凡そ世の人一度事業に就かば熱誠奮勵勉めて倦まず、奢侈虛飾を避けて流行を逐はず、不撓不屈の精神を以て事に當れ、苟くも困難に遭遇して忽ち挫折失望するが如きは男子の深く誡めて取らざるところ、其難事に會する毎に之れ天自己の奮闘力を試驗するなりと思惟して、愈々勇を鼓して之を擊破し、禍を轉じて福となし以て益々心身を鍛錬するを要すと、君が事業の難に屈せずして遂に今日あるに至れるもの亦故ありと謂ふべし、而かも君其業を經營するや失あるも落膽せず功あるも安んぜず、專心製絲の業に勵みて未だ嘗て他業に指を染めず、虛榮を忌みて投機的手段を避け步一步着々として事業の基礎を鞏固ならしむるに力めたるなり、而して人あり氏に就て斯業の蘊奧を叩けば喜んで之を延見し肺肝を吐露して其蘊蓄を披瀝し敢て藏するところなし。

信州尾澤組第三工場汽罐室の圖

　君又壯時より繪畫を學び俳諧を好めり而して謡曲は其最も得意とするところ、中道業務と相闘ふに及びて、一時之を廢しきといへども今や業を其子に委ねて又謡曲に親しみ朝々の聲諏訪の湖神をして夜々驚起せしむといふ、斯業の爲君冀くは健在なれ。

桑園年中行事（承前）

愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎
馬場由

三月（啓蟄 春分 陰曆二月節）

此月の中旬から彼岸に入るのである、彼岸の中日は一般に知る如く春季皇靈祭で、此頃になると春は漸く深くなつて彼岸櫻もわれは顔に咲き初める。

鶯のあちこちするや小家がら　蕪村

うたゝねに使三度や春の雨　兀董

疊の目一づゝ伸びるといふ、日足も餘程長くなつて來た、名も知らぬ草といふ草が柔い春の空氣を呼吸すべく野を緑に染め初めると、門の絲柳の小枝々にも春の生氣を含んだ色を付けて見せる、春の雨が音もなく之等の草木に惠の露を贈るので桑の樹も漸く其發育を開始して芽が膨み初める、從て此月のとるべき仕事は頗る多い、其最も必要なものは曰く耕耘、曰く施肥、曰く結束解舒、曰く高木作春伐整枝、曰く接木是てある。

第一回耕耘（春季耕耘）

深さ四五寸の程度に園面を平起しとするのであるが、此日は恰も雜草の發生期であるから鍬を手落なくよく入れる樣に注意し、土壤は丁寧に粉碎するがよろしい、之から後は晩霜襲來の恐があるから園面に凹凸のない樣に平坦にせねばならぬ。

第一回施肥

桑芽は漸く膨大して一つ二つ破れ勝ちとなつて來ると、桑樹の生氣渤々として盛に肥料を吸收する、從て成るべく腐熟した肥料を施すがよろしい、第一回施肥は第一回耕耘の後に施すものであつて、根刈、中刈仕立の桑園に在つては一畦隔て高木は根の周回（太さ）の三倍程の距離に幅一尺深さ一尺の溝を輪狀に掘り、此中に肥料を投入して上に土を薄く被ひ凹形を存じて置くのである。

肥料には稻稈、落草、雜草、廐肥及人糞尿の混合堆肥を用ゐるので、其用量は桑園一反歩に對して百二十五貫乃至二百貫が適度である。

今堆肥製造に供する各種原料の分量を計算して見ると左の通りである。

一反歩に付刈桑凡そ五百貫の收穫あるものとすれば年々に補ふべき三要素成分の分量は次の通てある。

窒素	三貫百八十匁
燐酸	五百匁
加里	三貫六十五匁

上の原料を用ゐて肥料を製造するのは大凡そ左表の如くである

第一種

品目	數量	窒素	燐酸	加里
藁	一〇〇	〇、六三	〇、一一	〇、八五
落葉	五〇	〇、五四	〇、〇九	〇、一〇
廐肥	一〇〇	〇、五八	〇、二八	〇、五三
雜草	五〇	〇、二五	〇、〇五	〇、一一
人糞尿	三〇〇	一、七一	〇、二四	〇、八一
合計	六〇〇	三、七一	〇、七七	二、四〇

第二種

品目	數量	窒素	燐酸	加里
[illegible]	一〇〇	二、九二	〇、七七	二、〇五
雜草	五〇	〇、二五	〇、〇五	〇、一一
人糞尿	一〇〇	〇、五七	〇、〇八	〇、二七
合計	二五〇	三、七四	〇、九〇	二、四三

施肥の要は土壤養分の補缺に存するのであるが、其土壤の性質及氣候の如何によりて大に酌量せねばならぬ、又三要素の配合が惡いときは到底其植物は完全な發育を遂ぐるものではない。（其詳細は池田著桑樹栽培全書及同著桑新論を參照せられたい。）倘左に主なる肥料の主要成分及有機物水分の分析表を揭げて參考とすることにした。

種類	水分	有機物	窒素	燐酸	加里
人糞尿（日本人平均）	九五、一〇	三、五七	〇、五七	〇、一三	〇、二七
同（西洋人平均）	九三、五〇	五、一〇	〇、六七	〇、二六	〇、二一
馬糞	七六、〇〇	二一、〇〇	〇、四四	〇、三五	〇、三五
牛糞	八四、五〇	一四、六〇	〇、一七	〇、一四	〇、〇四
羊糞	五七、〇乃至六五、〇	三一、〇乃至四二、〇	〇、五乃至〇、七	〇、三乃至〇、六	〇、一乃至〇、四
馬尿	八九、〇乃至九一、〇	六、四〇	一、五〇	〇	一、五〇
牛尿		九三、五〇	四、五〇	〇、五乃至〇、八	〇	一、四〇
羊尿	八六、〇乃至九〇、八	五、〇乃至一二、〇	一、五乃至二、〇	微少	二、一乃至二、五
鷄糞	五六、〇〇	二五、五〇	一、六三	一、五四	〇、八五
鵞糞	七七、一〇	一三、四〇	〇、五五	〇、五四	〇、九五
鴿糞	五二、八〇	三〇、八〇	一、七六	一、七八	一、〇〇
蠶糞	六〇、〇〇	—	一、四四	〇、二三	〇、一一
蠶蛹（新鮮）	七八、八八	一九、七〇	一、四四	〇、二一	〇、二〇
同（風乾）	—	—	七、四七	〇、八八	〇、四四
同搾粕	八、四六	八八、四五	六、九五	一、五七	〇、四七
乾鰮（平均）	七、〇〇	六七、一〇	七、五〇	五、七〇	〇、七〇
乾鰊同	一四、六〇	六二、五〇	五、六〇	二、一〇	〇、六〇
鰮搾粕	一三、五〇	六四、二〇	九、五〇	四、〇〇	〇、五〇
鰊搾粕	一〇、五〇	七三、一八	八、五〇	五、六〇	〇、一〇
獸骨粉	八、〇〇	三四、五〇	五、八〇	二二、〇〇	〇、二〇
野草（生草）	四〇、〇〇	一八、二〇	〇、五四	〇、一四	〇、三八
紫雲英同	八四、〇〇	一四、〇〇	〇、四八	〇、〇九	〇、三七
胡枝子同	七六、〇〇	一八、五〇	〇、五九	〇、一三	〇、二三
草藤同	八三、〇〇	一四、五〇	〇、四九	〇、〇九	〇、二三
赤苜蓿同	八〇、〇〇	一八、〇〇	〇、五八	〇、一三	〇、四六
白苜蓿同	八〇、五〇	一八、一〇	〇、五六	〇、一八	〇、二一
青刈豌豆同	八一、五〇	一六、一〇	〇、五一	〇、一三	〇、五一
同大豆同	八〇、〇〇	一八、五〇	〇、五八	〇、〇八	〇、四七
萱同	五五、〇〇	三五、一七	〇、五三	〇、〇四	〇、六八
小[illegible]同	六七、〇〇	三〇、六八	〇、六五	〇、一〇	〇、五五
青刈蓼類同	七八、五〇	二〇、八〇	〇、五五	〇、一四	〇、四四
青刈蕎麥同	八四、〇〇	一三、五〇	〇、五五	〇、〇六	〇、二六
蕪菁同	八八、八〇	九、〇〇	〇、五〇	〇、〇九	〇、三六

海草（藻類）	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
水稲粉	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
小麦粉	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
大麦粉	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
玉蜀黍粉	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
麻豆粟	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
大豆粟	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
蕎麦粟	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
雲薩粟	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
大豆油粕	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
胡麻子油粕	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
酒糟粕	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
鰊粕	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
鯡油粕	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
豆腐粕	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
鰹節屑	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
木炭（平均）	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
骨炭（同）	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
歴史（新鮮）	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
同（中熟）	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇
同（腐熟）	三〇〇	一〇〇	〇・四〇	〇・三〇	一・五〇

肥料の廉否計算法

肥料は其種類に依つて性質を異にするから、同一成分量の、ものと雖も分解の緩慢なものは劣等と見ねばならぬ、從つて之等は實際問題として時に應じ機に臨んで適宜斟酌するとが必要である、併し通常其廉否を知る方法は各百分中に含ひとところの窒素に五、磷酸に二、加里に一を掛けて其合計を以て其肥料の價格を割るのである、其割つた商の最も小さいものが比較的廉價の肥料であるといふことを知るのである、即ち之を算式に表すと次の通りになる。

$$\frac{\text{窒素}\times5+\text{磷酸}\times2+\text{加里}\times1}{\text{肥料の價格}}$$

又別に其肥料に含んで居るところの三成分に夫々其市價を掛け其合計を以て其の肥料の價格を見るのも一つの方法であらう。

結束解舒

第一耕耘及施肥を終つたならば直ちに結束を解舒せねばならぬ、之を解舒するに當つて注意すべきは其芽を傷けない樣に丁寧に之を取扱ふことである、若し又解束の時期が遲れると芽は漸く綻び初めるので解束の爲に芽を損ずることが甚だ多いものである。

結束を解舒するに當つて其結束の中に往々害蟲の潜んで居るのを發見するものであるから、之等は發見次第直ちに捕殺すべきである。

高木作春伐整枝

高木作春の桑は此月の上旬乃至中旬に於いて必ず春伐整枝を行つて枝條の整一を計らねばならぬ、之をするには未だ成木せぬものは一尺乃至三尺順年短くして、既に成木したものは三四寸を選して之を截り取るがよろしい。

接　木

接木は此月の上旬に於て行ふのである、併し種類によつて多少の遲速を免れぬ、即ち早生種は上旬中生種は中旬晩生種は下旬といふ順序に行ふのであるけれども、地方の氣候に依つて、芽の未だ綻び初めぬ前、樹液の環流を始るに先つて芽の稍々膨れて生氣の勃動たるときに行ふものである。

接木には枝接、根接、芽接の三種があつて枝接にも赤皮接、搭接、割接等の方法がある、併し何ら通常は皮接法を行ふのである、若し砧木が大きければ割接を行ふのであり、何れの方法を用ふるにしても其接合部は之を削り取る者の形の成層と、皮と木質との境の處）をピッタリ密着せしめ、前夜水に浸して置いた蒟に之をシッカリ縛るので、其上に嫁接蠟紙を施すときは更に妙である、此ものを段植とするときには畦間を二尺、位とし五寸位の距離に植え、接目迄土を覆つて置く事である。

根接は、枝接の位置を轉倒した迄で其方法に於ても前者と違はぬのであるが、芽接は夏期即ち樹液の環流盛なときに行ふのて、次年の伏芽を利用し其部分の皮層に芽根を附けて削り取り別に砧木の皮を丁字形に切て前のものを此處に嵌め込之を前法の樣に縛り置き接芽の眞直に芽が尺以上も伸びたと接合部から上を切り放つのである（接木法の詳細は油田桑太郎著桑樹栽培全書にあるから參照せられたい）。

三月三日義、間歩南城南、似曙赤二峰象、方洛未洛籠、遠聞聲尊前羽、即と草承織々一料是斎學得、終朝一箔籠、
行々春のふたとや咲く藤の花
そゝなだに後の色の中まりに

金持雷頂上の一鐘

和田垣博士妙精丸の三號に載ういふ事な遇べもれた
古歌に「綾あればあるに任せて住しくなるなけりやないて獄はしくなる」といへる通り、金な欲しがるのは天下萬民の通有性で、兎に角い病弱の一種である、それ故貧の天海僧正に謂言して「事足れば足るに任せて事を安けれ」と言はれたが、知足の人は地上に伏すとも樂安樂である、不知足の人は天上に坐じても何不足の念な斷つ事が出來ない、誠に恒正の謂言は現代金銭瓶上の一大鑑である、知らずや「氣は長く持めば除く色うすく食細ふして心ひろがれ」と金持雷頂
君……

絹況

横濱市場

生絲貿易不振といふ聲を今春になつてから一際激しく聞くやうだが、之は全く實況を知らない者の良い加減な想像話が一犬虛に吠て萬犬實を傳ふる的に傳つたのではあるまいか、ナル程之を一昨年の今頃に較べて見れば全く雲泥の差ではあるが、昨年に比べてみれば本年は遙に良い現象を示して居る、尤も一月末日までの間はいつても人氣不振……市場閑散……絹況不味なんといふ緣起の良からぬ言葉で持ち切つたから、素人の眼には生絲貿易滅茶々々のやうに觀ゆるかも知らぬが其實ソー悪くはないのだ、試に本年の二月と昨年の同月とを對照してみるが良い。

	入荷	売渡	賣了
昨年二月	六、六〇七半	四、八七九半	四十一年二月
今年二月	一、八四二	一、七一五	四十一年二月
比較	五、八四二	五、六八八半	一〇三〇
	一、二二〇半	一、一四六二	七九五

右の如く本年の方が入荷に於て一千七百二十八個積戻に於て百二十七個手合に於て百五十三個半、賣了に於て三千七百五十八個を增して居るではないか、然らば價格はドーであらう。

最高價
最低價

先づ一ん な 盛況で本年のカサが高値に於て三拾圓低く直に於て五十圓安くはあるが、併し輸出の數量が昨年よりも遙に多いから結局之に依て安い分を埋め合せても尙且つ餘裕があるといふ譯である、概して云ひ得る三月中の横濱市場は悲觀すべきものではなかつた、果して然らば三月中の市況はドーであらう、之は次號に掲載するとして吾輩少しく意見を附記して置きたいのだ。

彼の尺蠖の屈するのは將に大に伸びんとする前提であるが如く昨年來の市場は全く尺蠖の屈したやうなものであるから今日此之靜況は他日大發展の前提であると爲し、寧ろ當業者の勇氣は百倍しさうな者である、歐米市場の形勢を觀れば購買力は漸次其の增進を認むるが如く出來るけれども決して減退する模樣は見えない、又た海外の財界に就て之れを見ると多少憂慮の種子として目すべき問題もないではないが、併し微々たる一線事は財界に何等の影響をも與へずしとも思はれない、況て金融は益緩和の趨勢公債は依然騰貴の傾向銀貨は相場赤字の狀況であるから、一に標準を海外財界の良否に置く絹價の前途も眺むれば蠶家絲家共に長夜の眠りを破りて正に之れより光明面に潮歩するの準備を爲して

明治四十二年二月生絲集散表

自一日
至二十八日

	持越	入荷	賣了	地方積戻	輸出
器械	二八、五七八	五、三六五	一一、六三五	一、三六〇	二〇、九四六
座繰	七、七七〇	五、五七七	二、六八五	二六八	五、三七四
撚返シ	二、一一九	六一八	一、三二一三	一二二	一、二九二
撚返シ	二九二	六七	二〇六	九〇	六三
雜絲	六、六〇七	一五、八四九	一、八四二	二七、六七五	
合計	三八、七五九				

備考

一、表中原位置は九貫目を指す
二、持越とは答月より本月に持越したるものにして本月一日の調査帳簿に載せ
三、上記賣了合計と左記日賣了合計と符號せざるは調査より調査部の間に
四、賣了中兼國に輸出せるものは七千九百十八俵にして歐洲に輸出せるものは一千六百三十八俵なりとす

御左に二月中の生絲集散種別表を掲げて參考としませう。

明治四十二年二月生絲集散日別表

	入荷	手合	賣了	引渡	輸出	積戻	地方	國名	社名	別種	最高價	最低價	摘要
一日	二一〇							甲斐 信濃	祖製絲社	□	九九〇 九三五		拵込に手合出來ざる外染たる商談なく就中醒酔かり見し
二日	一五六	七四	三七〇					上野 信濃	越信社	銀	九六五 九三五		弗々當日の商ひありしが氣乘は暫々引續み始終なりし
三日	一四四	八九	六六七	一〇				甲州 岩代	祖製絲社	馬	九一〇 九〇五		繰りなければ市場柔に氣緩りなし
四日	四八九	七五六	六〇三	一八	一、〇〇一			甲州 岩代	祖製絲社	馬	九一〇 八〇五		同三貫目の手合出來し直段は同に昨日なかりし
五日	二四八	一〇八	六四五					仁田 上野 岩代	紅一織社	馬	一〇二〇〇 八〇五〇〇		同日賣氣ありて相應の手合出來し直段は同に昨日なかりし
六日	一五二	二七三	三六八	八	三九七			三河 上野 岩代	三作製絲	馬	九一〇 八四五		日星しき動相なく一寸落付の風況なりし
七日					四七五			三河 上野 岩代	三作水社	馬	九八〇 八六五		格別變りあらざるが知き何分決て商談少なし

八日	七七七	二一二	三九五	一八	—	一一二	信濃 丸小製絲 ○	上野 碓氷社青紅葉 ×	一、〇二〇	八五〇	安直に應ずる物を多少拾ひ買する外り總じて氣配ちり／＼不振に赴けり
九日	一二四	五四五	八七六	—	—	六五半	武藏 林組 □	岩代 共同三馬 +	九三五	八一〇	座繰其他に商ひ出來せしが直段はちり／＼安く引續き面白からざる成行なり
十日	一九〇	三六六	四一二半	五五	一、〇六二	九八半	武藏 石原製絲 △	上野 下仁田社三橋 ×	九五五	八八〇	弗々買人ありて信州上一番格九百十圓と下押を告げ何分不引立の成行なりし
十一日	—	—	—	—	—	—					大祭日
十二日	三七二半	九〇	四〇六半	一八	—	三六	信濃 飯田片倉 □	岩代 共同二馬 +	九七〇	八四五	引續き不人氣にて當用口へ賣行ありしのみ
十三日	二三五	二一四	七七五半	六三	四六九	九八	近江 昆提製絲 □	上野 交水社旭龜 ×	九七〇	九一〇	需當品を安直に摘み取りせらるゝのみ氣配依然不味なりし
十四日	—	—	—	—	—	—					日曜日
十五日	二五七半	四七三	六八九	二〇	—	五八	阿波 小口組 □	岩代 共同三馬 +	九三五	七九五	昨三館買氣ありて直段は五圓安にて取組出來せり
十六日	一八一	三一三	三八四半	—	—	六八	武藏 山丸製絲 □	岩代 共同二馬 +	九三五	八四〇	捗々しき商談とて出でざるも先づ相場變りなかりし
十七日	二九二半	六五三	九八四	五四	一、三二三	一二六	美濃 福助製絲 ○	上野 碓氷社二人組 ×	一、〇二〇	九〇〇	必用物には幾分相場を持直したる手合もありし
十八日	二四九	七六〇	六一一	—	—	七二半	信濃 俊明社 □	同 信寮組 □	九一〇	九〇〇	信州上一番格品かすれ居り直段は五圓高を示したりし
十九日	二四〇半	一六一	八一二半	三七	—	七六半	伊賀 東海製絲 □	岩代 共同二馬 +	九七二半	八三五	商談稍々少なかりしも變りなく保合へり
二十日	一九七半	四〇六	八八二	—	九一七	二一八	武藏 荒谷製絲 □	同 鶴見川社秩 ×	九六〇	八四〇	一兩度買氣ありて手合出來し相場信州上一番五圓高なりし
廿一日	—	—	—	—	—	—					日曜日
廿二日	五三一	五五	九九七	五五	—	九三	但馬 但馬共同 □	信濃 中野館 □	九八〇	八九〇	捗々しき入電無にて出來直ば別に變り見へざりし
廿三日	九七	六三	八五六	四一	—	一八三	甲斐 金鳳社 □	信濃 日本館 □	一、〇二五	九〇五	一般に靜かながら變りなく保合へり
廿四日	三一一	三五	七一八半	—	—	九七	信濃 蘭川製絲 □	同 常田館 □	九三五	九一〇	各館電信待の姿にて染たる商談なかりし
廿五日	三〇〇半	二二八	七六三半	一一三	八六一	三四	武藏 富國館 □	岩代 共同三馬 +	九三五	八〇〇	座繰に返電來り其他一兩館弗々取組出來し直段概して安く面白からざる成行なりし
廿六日	四二六	九一	五二六	二八	—	四一半	薩摩 鹿兒島共同 □	武藏 小口組 □	一、〇三〇	九三〇	信州上一番少しく出來せし外捗々しき商談なく續いて不味の成行なりし
廿七日	二二八	一八	七五〇半	—	一、二二〇	七〇半	甲斐 大盤館 □	武藏 收伸社金 ×	一、〇〇〇	八七〇	鎌々商談なく半休業の姿にて引續き不味の成行なりし
廿八日	三三〇	—	—	—	一、八四一	—					日曜日
合計	六、六〇七半	五、八四二	一五、二二〇半	五三七	九、五五六	一、八四二					

倚左に本年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしむる爲前年對照表を示すとせう。

年月	持越	入荷	賣了	殘	繰越	數量	輸出價格
四十二年一月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	一、二二〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十二年二月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]
四十一年二月		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]
比較		○[illegible]	[illegible]	○[illegible]		[illegible]	[illegible]

▲は減じた印○は増した印

此表に依て見れば入荷も増したが賣了も增したソーして輸出が八千二百二十一個といふ大激增を示した其價格も亦昨年よりも多いことが實に六百七十二萬五千四百二十七圓といふ數量を示して居るのである、之に依て市場の大勢が知らるゝではないか徒に絲價の低廉を苦にして前途の經營を等閑に附するが如きは愚の極點ではあるまいか。

長崎縣蠶絲業に關する通信

通信委員　古賀治八郎

我長崎縣は全國中尤も蠶絲業不振の縣なりしも昨年度より鋭意之が獎勵に努めつゝあり今四十一年度に於ける事蹟の概要を摘記すれば左の如し。

（一）蠶業獎勵

（イ）稚蠶共同飼育　稚蠶共同飼育は三十九年以來獎勵金を交付し、以て其の施設を獎勵せる結果年々增加の傾向を呈し、本年に於ては縣内を通して八十四ヶ所の設置を見るに至れり、其掃立總蟻量は三貫百二十二匁三分にして飼

育の結果、孰れも良好の成績を得たり、獎勵金は一ヶ所十圓乃至二十三圓にして合計一千二百〇三圓を支出せり。

(ロ)蠶絲業技術員の施設　從來縣に三十名の短期巡回教師を置き當業者を指導勸誘せしめたるも四十一年度より、島郡の施設を改め縣内を通して常設四名短期三十二名を設置し　之に對し獎勵金として縣費を以て其の經費の十分の六此金三千六百四十三圓六十錢を支出せり。

(ハ)桑苗配布　桑園增殖獎勵の爲四十年度より桑苗無償配付の計畫を爲し島郡市又は島郡市農會をして桑苗圃を設置せしめ、之に對し縣費を以て、接木圃苗一反歩六十二圓實生苗圃一反歩三十四圓以内の獎勵金を交付することゝせり、而して本年春季(四十年度)新設の苗圃は縣農會西彼杵郡農會對馬渡町村組合の三ヶ所にして、接木苗圃反別九町六反歩實生苗圃反別三町五反歩合計十三町一反歩此獎勵金七千百四十二圓を支出せり、仍て此の分に對しては接木苗圃百二十四萬八千本實生苗百四十本合計二百六十四萬八千本を配付せしむる豫定なり、尙ほ四十一年度の經費を以て前三者に對し、接木苗圃十一町五反五畝歩を設備せしむるの條件にて獎勵金七千百六十圓交付の指令をなしに より、明年冬季に於て接木苗圃百五十萬本を配布せしむる豫定なり。

(ニ)模範桑園設置　桑園の改良を圖る爲四十年度に於て町村又は町村農會をして、一ヶ所一反歩以上の模範桑園を設置せしめ、縣費より、一ヶ所金十圓以内の獎勵金を交付することゝし、四十一年春季新設の桑園は百一ヶ所にして其の成績頗る良好なるを認めたり。

(ホ)共同殺蛹器設置　四十一年度より共同殺蛹器の施設を獎勵し縣費を以て一個十圓以内の獎勵金を交付し、其の施設の優秀なるものには特別獎勵金を交付することゝせり、而して本年度に於て設置したるものは三十四ヶ所にして此獎勵金四百六十五圓を支出せり。

信州尾澤組製絲所米國式乾燥室階下の一部作業の圖

(二)蠶業教育

(イ)本縣々立農事試驗場に於ては三十三年以來蠶業研究所なるものを設け、研究の傍ら生徒を養成し來りしが(六ヶ月程度)本年度に於ては卒業生十六名を出したり。

(ロ)本縣々立農學校に於ては養蠶の課目を設け本年より授業を開始す。

(三)品評會

長崎縣蠶絲會に對し縣費三百圓を補助し第一回繭生絲蠶種の品評會を開催せしに出品數千七百餘點に達し頗る盛況を呈せり。

(四)蠶病豫防

事務所を長崎、島原、諫早、厳原の四ヶ所に開設し常設吏員三名臨時吏員二十一名書記助手四十七名にして事務の繁閑に隨ひ吏員書記助手の配置等其宜しきを得事務上遺漏なきを期せり且つ本年は蠶種製造高激增し原種用種凡そ百萬蛾製絲甲種二千枚に逮せり蠶蛆驅除に對しては特に注意し蠶蛆驅除豫防法なる印刷物を縣下に普く配布し、其期節に際し吏員を派遣し講習をなさしめる等之が周知に努めたり、病蠶歩合に於ては著しく減少を來せり、且つ漸次製絲用種の製造額減少し原種用種の製造額增加せるは喜ぶべき現象なりとす。

佐賀縣蠶絲業に關する通信

通信委員　玉木浪三郎

明治四十一年佐賀縣告示蠶絲組合設置規程(別冊)により昨年來設置せられたる組合數參十六箇所、組合員總數千五百九十四名にして各組合共に設置規程第一條の全部又は一部を行ひ、縣當局に於ては計千六百二十五圓の獎勵金を交附し、指導監督を怠らず漸次好果を收めつゝあり、尙又本年一月廿七日第一回各組合長會を佐賀縣會議事堂に開き吉田農事試驗場長、相田農事講習所長玉木農業技師の講演後各自の經驗談を爲し次て左記事項を決議したり。

一、組合基本金蓄積は最も必要なるに付各組合は必ず實行することとし其方法は組合の事情に依り定むること。
二、各郡内組合の連絡を計る爲め年一回各組合聯合にて組合長會を開くこと。
三、年一回定期に縣下各組合長協議會を開催すること。
四、各組合は四十二年度より必ず方針を定め之を勵行すること。

建議案

一、各組合聯合繭、生絲品評會を開催せられたきこと
二、蠶業視察員を他縣に多く派遣せられたきこと
三、年一回高等蠶業講習會を開催せられたきこと

蠶絲業組合設置規程

第一條　蠶絲業の改良發達を圖る爲部落に於ては二十戸以上町村に於ては五十戸以上の養蠶者共同して組合を設け左の事業の全部若は一部を施行せんとするものは本規程に依る可し

一　桑園の改良及增殖を計ること
二　蠶室蠶具の消毒を勵行すること
三　蠶種を一定し且つ框製種の共同購入をなすこと
四　蠶種の共同貯藏をなすこと
五　蠶種の催靑、掃立並稚蠶の共同飼育をなすこと
六　蠶業講習會又は談話會を開催すること
七　繭品害の驅除及病蠶の處理を完全ならしむること
八　共同殺蛹乾繭をなすこと
九　共同製絲をなすこと
十　共同揚返所を設くること
十一　繭又は生絲共同販賣をなすこと
十二　蠶業教師を聘するか又は指導員を設け指導又は注意せしむること
十三　桑園品評會を開催すること
十四　前各號の外蠶絲業の改良上必要なる事項

第二條　本規程に依り設置せんとする組合は前條の第一號乃至第六號の事業は必す實施するを要す
但し地方の狀況に依り本條の事業を變更增減することを得

第三條　本規程に依り組合を設置せんとするものは規約標準に依り規約書を作り左の書類を添付し組合設置の認可を知事に申請すべし規約及事業變更の場合亦同し

一　收支豫算書及事業方法書
二　組合員所有桑園の反別及收繭貫數又は製絲に使用すべき原繭石數調
三　組合員掃立蟻量及種類又は器具器械(蠶具は除く)の種類及個數調
四　役員氏名
五　事務所々在地名

第四條　役員の異動及施設事業を中止又は廢止したる場合は其の時々知事に届出つべし

第五條　本規程に依り設置したる組合は毎年三月末日限り事業施行の狀況其の成績並經費決算を知事に報告すべし

蠶絲業組合規約標準

何々(部落名/町村名)蠶絲業組合規約

第一條　本組合は組合員共同一致し蠶絲業の改良發達を計り其の利益を增進するを以て目的とし明治四十一年三月佐賀縣告示第百一號に依り設置するものとす

第二條　本組合は何郡何町村大字何々小字何々内に於ける養蠶者を以て組織す

第三條　本組合は何々(部落名/町村名)蠶絲業組合と稱す

第四條　本組合に左の役員を置く

一組　長　一　名
一理　事　一　名
一相談役　若　干　名

第五條　組長は組合事務を統轄し組合を代表す
理事は組長を補佐し事務を處理す
相談役は組長の協議に預り組合事務を監督す

第六條　役員は組合員中より選擧し其の任期は二ヶ年とす役員に選任せられたるものは正當の理由なくして辭任することを得す
役員は名譽職とす

第七條　本組合の經費は組合員の負擔とし其の豫算並賦課徵收法は組長に於て相談役と協定し組合員三分の二以上の同意を經るものとす

第八條　經費決算は毎年二月組長より相談役の承認を經て組合員に報告するものとす

第九條　本組合に於て施行すべき事業は組合員の協定を以て別に之を定む

第十條　本組合員に加入せんとするものは組長に申出て其の承認を求むへし脫退せんとするものも亦同し

第十一條　本組合員にして脫退したるものは組合財産に對しては其の權利を喪失するものとす

第十二條　組合員にして本組合規約及組合規約に基き協定せし事項に違背したるときは組長相談役の協定に依り事件の輕重に從ひ金拾錢以上貳圓以下の違約金

を徴收し該金は組合の雜收入に充つるものとす
第十三條　本規約の變更は組合員三分の二以上の同意を經知事の認可を受くるにあらざれば其の效力なきものとす
前記規約堅く履行すべきことを誓約し組合員一同左に署名捺印す
年　月　日
何郡市町村大字何　何　某印
同　何　某印
同　何　某印

◎佐賀縣告示第百二號
蠶絲業組合獎勵金交附規程左記の通相定む
明治四十一年三月十七日　佐賀縣知事　香川輝

蠶絲業組合設置獎勵金交附規程

第一條　明治四十一年三月佐賀縣告示第百一號蠶絲業組合設置規程に依り設置したる蠶絲業組合には本規程に依り獎勵金を交附す
第二條　獎勵金の交附を受けんとする蠶絲業組合は其の年一月末日迄に其の收支豫算書及事業方法書を添付し第一號書式に依り知事に出願すべし
第三條　獎勵金は組合事業費に對し三分の一以內を交附す
第四條　獎勵金は事業終了後に之れを交附するものとす
第五條　知事は隨時吏員を派遣し組合事業の狀況及經費の收支を調査し必要と認むるときは相當の命令を爲すことあるべし
組合は前項の調査及命令を拒むことを得ず
第六條　知事は組合の管理不適當と認めたるとき、豫定の事業を遂行せざるとき又は本規定に違背したるときは獎勵金交附の指令を取消し又は其の既に交附したる獎勵金の全部若は一部を返付せしむることあるべし

附　則

第七條　本規程は本年四月一日より施行す
第八條　本年度に限り第二條の出願期限を五月末日迄とす
（第一號書式）

蠶絲業組合設置獎勵金下附願

明治四十一年三月本縣告示第百二號蠶絲業組合設置獎勵金交附規程に依り獎勵金御下附相成度收支豫算書及事業方法書相添へ此段相願候也
郡町村何々蠶絲業組合
組長　何　某印
知事宛
（附記）收支豫算書及事業方法の雛形は別に之を配布す

紋羽病に就き質問
石神金次郎

紋羽病が桑園の大部分に浸蔓して居るので充分の消毒を行ふことが出來ませんから、掘採後他作物を作り、該病原物の死滅した後ちに改植しやうと思ひますが、一ヶ年位他作物を作りましたのでは該病の撲滅は出來ますまいか。

答
學藝委員 理學士 農學士　堀正太郎

桑の紫紋羽病は甚だ頑強な病氣であつて、容易に全滅することが出來ない、一年や二年他の作物を作つても死滅せしむることは六ケ敷い、少くも病菌の寄生しない種類の作物を四五年間も作らなければならぬ、普通作物で紋羽菌の寄生し難い作物は穀類であるが、穀類でも少しは根部に寄生するから、收穫の後には刈株を掘り起して燒却するのが安全である。

最も効力の強いのは土壤の消毒である、之には少くも一反歩につき十五圓乃至二十圓の金を投じなければならぬ、現今土壤の消毒には石灰窒素が一番價が安くて又効力が多い、此石灰窒素を一反歩につき、二十貫目か二十五貫目許りの割合に土を掘り起して土壤に混和し置けば、二三十日の間には病菌は大概死滅する、併し桑の樹は根が深いから土を深く掘つて混ぜなければ効能がない。

桑病に就き質問
群馬縣 通常會員　森尻九八郎

（一）桑園に於ける紋羽病が他の作物に傳染して、其根を腐蝕させますが、之が豫防法はありますまいか。
（二）桑樹の皮膚に龜甲形のものが附着して居りますから調べてみると、其內面は赤く中央に十字形に線の凹みたる蟲がありて、愈々成熟すると其中には曲尺にて二三分の蟲が居ります、之は何んでありますか。
（三）桑樹の萎縮病に就ては種々の説がありますが、最近に於ける學説を承りたい。
（四）桑樹の皮膚に恰も虱の卵のやうな小さい白いものが群集して、其附着物の木を細くし衰弱せしむることがあるので困ります、此豫防法を伺ひたい。

答
學藝委員 理學士 農學士　堀正太郎

（一）桑の紫紋羽病の豫防法は石神氏の質問應答を參照せられたい。
（二）桑の樹皮に龜甲形のもの附着し居る云々の病氣は、多分枝枯病を發生したものであらうと思ふけれども、實物がないから判然し兼る、早速に標本を送られたい。
（三）桑の萎縮病は窒素質肥料のみを施して勢ひよく、生長せしめたものを過度に葉を採り、又枝を剪るので貯藏養分が不足して起るのであるから、刈桑ならば枝を輪伐するが宜しい。
（四）樹皮に白き卵の如きものゝ附着するのは、多分桑蚧と稱する介殼蟲の寄生したのであらう、之を驅除するには石油乳劑の十倍位のものにて洗ふが宜しい、又純石油を薄く塗つても宜しいが之は寒中でなければ害がある。

蠶種の件に就き質問
通常會員　齋藤次郎吉

甲器械的（或る技術家が嚴密なる）鑑定に缺點なき原種甲種と、乙肉眼（産卵色澤形狀水引産卵數其他）鑑定に缺點なき製絲用種（紅製にて各區御殺なしたるにて）同一品種を、昨年夏秋三回飼育したるに毎回乙種が優良の質繭を得たから、尤器械的檢査の薄弱なる樣に察せられますが、概して右樣の結果を見るでせうか。

答
學藝委員 農學士　林驛作

質問の意味が充分に明かでないけれども、思ふに飼種類にて甲は原種用種なる故顯微鏡檢査に合格せるもの、乙は製絲用種で顯微鏡檢査を經ないでも、肉眼鑑定の結果は缺點のないもので、此甲乙兩種を飼育した結果に差があると云ふことであるか、果して然らば其原因は左の如きものであらう。

イ、甲と乙とは種類は同じでも、種繭は同一飼育者が同時に生産せしものではなくて、甲の方が元來劣るではないか、若しそうでなくて同一種繭より製種せしものとしたならば。
ロ、甲と乙とは蠶種の保護取扱に差があつたのであらう、若しそうでなくて同一の保護取扱をしたものとすれば。
ハ、甲と乙とは飼育を異にしたために甲の成績が不良に陷いつたものであらう。
ニ、元來顯微鏡檢査は蠶卵內に寄生した微粒子の有無を判定するために行ふものであるのは勿論であるから其之を行ひて無毒の保證あるものと、之れ無きものと、優劣は毫も疑を容るゝ餘地がないのである。
ホ、併し假令顯微鏡檢査に合格した無毒の蠶種でも、素質が虛弱であれば顯微鏡檢査を經ないでも、元來強健なる素質を具へ、亦病毒無き（縱令無毒の證明なきも實際に無毒なれば差支なし）ものに比し飼育上の成績の劣ることは明かであらう。

二化性蠶種の黑種となる原因に就き質問
福岡縣 通常會員　加藤平藏

二化性蠶種の製造に際し黑種となるものの甚だ多いのは如何なる原因でありますか。

答
學藝委員　八田達也

二化性蠶種の黑種に變性するのは、飼育中の温度が比較的低温多濕であつた場合又は給與せる桑葉が柔軟にて水分多く蠶兒が著しく肥大した等の場合にも起ることであるが、其尤も主なる原因は究理法（即催青法）の不完全の爲である。原種究理は唯一の變性豫防法であつて、其普通に行はれて居る適當の風穴內に貯藏された原種は凡三十日前に究理室に移し、最初四十一二度の低温から毎日半度乃至一度位の標準に漸次高温の場所に移し三十日目に六十四五度に達せしめ發生せしむるものである、究理法及蠶兒飼育に關する事項は石田孫太郎氏著日本養蠶作法大全と夏秋蠶飼育法に詳記されてある。

蠶蓙の代りに紙を使用する件に就き質問

會務錄事

三重縣
通常會員　行方周太郎

鑄造の代りに紙を使用することの便宜所謂なることに説き替て本論に町田氏の御高説を拝聞いたしたが、猶左記の事項に就き説明を願ひたい。

（イ）答通の鑄造に當たり鑄型の上に紙を敷くときは鑄型の隅み目に觸れない部分は紙が破れ、自然鑄型の高熱を生じて鑄見が不整一となり取扱上不便な感ずるやうなことがあらうか。

（ロ）紙の重ね部分に常に鑄造に付際れ破られる恐れがあるまいか。

（ハ）紙は新聞紙、美濃紙又は鑄造用のものに代用するものみにて足るのでありますか若し紙り重ねるものとすれば何枚位が適度でせう。

答　特別會員　町田治助

（イ）〇〇番通の鑄型厚さ二寸五分乃至三寸程大の鑄型ならば、紙の敷れることは無い、尤も鑄造時等に際し、甚敷温るときは幾分か焦る傾向になる故、之が爲に嗣鑄に何等の悪影響を及ぼすことは恐れも無いのである。

（ロ）紙は美濃紙を第一とし、半紙新聞紙等又用ふる足る、何れも一重でよいのである。

（ハ）紙は二重三重の厚紙は却て宜しくない。

歯の形狀に就き質問

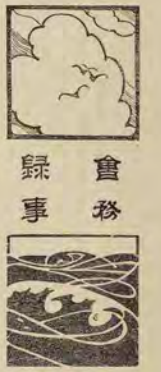
福島縣
通常會員　廣田磊一郎

概して外國産歯は圓形にして縦目多く、本邦産歯は楕圓形にして横目が多い、若し外國種を本邦で飼育する場合の相異は何程の差を來すことがあるけれども其種類固有の形狀を保持して居る、横目は深くなるやうに見ゆるのであるが、之ならいつぱ本邦種か外國にて飼育するも可ならず本邦固有の優狀を保持する譯である。

學術委員
農學士　林　驛　作

一、歯の形狀と鑄造時の飼育する場方の相異は何程の差を來すことがあるけれども其種類固有の形狀を保持して居る、横目は深くなるやうに見ゆるのであるが、之ならいつぱ本邦種か外國にて飼育するも可ならず本邦固有の優狀を保持する譯である。

二、歯の形狀と鑄造時の飼育する場方の相異は何程の差を來すことがあるけれども其種類固有の形狀を保持して居る、横目は深くなるやうに見ゆるのであるが、之ならいつぱ本邦種か外國にて飼育するも可ならず本邦固有の優狀を保持する譯である。



評議員會

三月三日本會事務所に於て評議員會を開く、出席者及決議事項左の如し。

副會頭農學博士　酒匂常明　石居一郎
林　驛作　羽田桂之進
八田趙也　本多岩次郎
尾澤琢郎　若尾爽造
吉池慶正　土屋泰
角田宮右作　鍵本宮三
紫藤卒　下田伊左衛門

決議事項

一、明治四十一年度決算の件

松平會頭事故の爲め出席なきに依り酒匂副會頭會長席に就き、吉池理事より四十一年度決算に就て説明を得たり、高橋、加賀山の兩監事に於て詳細なる調査を遂げられて證印を得たり、右に兩監事より報告するべき答なきを認め、次に決算を可決せり。

二、鑄造調査の件

羽田調査委員原案の説明を爲し、八田、尾澤、若尾諸氏の修正意見あり、審査の末修正なし可決せり。

三、大日本鑄物會議出席規定の件

吉池理事の説明に依り經費の支出を可決せり。

四、功績調査の件

鍵本調査委員より調査の經過を報告し、新第一號の原案を可決せり、次で吉池理事より製鐵健全者の功績調査は調査材料に就き支會より回答を待つものとして當事者に一任せられたしと陳ず、異議なく可決せり。

五、風土の相異から多少の形狀が小さくなる傾向があるので横目の知っては目立ちて見ゆるのである、之ならいつぱ本邦種か外國にて飼育するも可ならず本邦固有の優狀を保持する譯である。

六、歯の形狀と鑄造時の飼育する場方の相異は何程の差を來すことがあるけれども其種類固有の形狀を保持して居る、横目は深くなるやうに見ゆるのであるが、之ならいつぱ本邦種か外國にて飼育するも可ならず本邦固有の優狀を保持する譯である。

七、鑄造時の飼育する場方の相異は何程の差を來すことがあるけれども其種類固有の形狀を保持して居る、横目は深くなるやうに見ゆるのであるが、之ならいつぱ本邦種か外國にて飼育するも可ならず本邦固有の優狀を保持する譯である。

茨城支會幹事
墨田門三　郡弁佐十郎　海老原寄右工門　鍵淵宗之助
横田石次郎　高山精一

地方委員部職員の囑託

本會谷貫地方委員部委員副委員幹事に付本會々頭の推薦に依り後任　慈敬駿下より左の通囑託あらせられたり。

茨城支會　鈴木長一郎　宮土鈴木七二郎
志太　小川省三郎　安倍大澤宮二三
磯原　小野朝太郎　鵜野水野宮三郎

茨城支會幹事
太田眞尾兄　啓太郎　大久保久逸

今回本會々頭の推薦に依り慈敬駿下より左の通囑託あらせられたり

横田長太郎　荒木武雄

學藝委員の囑託

二月二十五日午後三時より鑄造調査委員會の第二回を本會事務所に開きたるが來會者は本多幹事より松平會頭、柴藤、本多、其他の各理事、委員に対し羽田、有馬、北村、芳賀の四氏に各出席攻究する所あり、午後九時散會せり、今後委員の一人なる加賀山氏は會員に就任に依り辞せられたるを以て、學藝委員芳賀榮四郎氏に補缺として囑託せられたり。

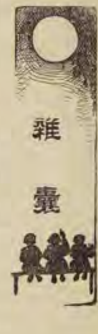
理事及書記の出張

吉池理事は會務の爲め二月十七日宮城縣鳴島の兩支會へ出張し二十一日歸京、次で同二十七日茨城長野の兩支會へ出張三月三日歸京せり。

加藤書記は三月九日會務の爲め埼玉支會へ出張、翌日歸京せり。

學藝委員の出張

茨城支會に於て二月二十八日より二日間鑄造講話會開設に就き講師派遣の請求あり、學藝委員横田東京鑄造研究所技師を派遣せり。



●成功する者はドコか違ふ　理髪職より起つて奮然製絲業に志し絲界の大成功者として其名を知られたる茨城縣古賀の小島館主小島倉吉氏類燒の災に罹りて意氣銷沈せんとするの際偶々勤儉獎勵の名譽を擔ひて感奮措く能はず早速創立十週年の紀念を兼ねて之が記念の大典を擧ぐ朝野の貴賓集る者千餘名席定りて儼然たるの時小島氏立て一場の挨拶を爲して曰く「皆樣今日御招ぎ申しても何もありませんで……今日の御馳走は御茶です私も火災に罹つてドーしやうと思つて居ましたが聖旨に感じまして益御國の爲に盡る事にしましたから必ず遠からぬ内に五百人繰にしますが其時は今度御酒を出しますが愈千人繰りにしますと御酒に御肴に山海の珍味を整ひてあらん限りの御馳走をしますから皆樣ヤー宜しく云々」と會する者耳語して曰くサーン成功する者はドコか違ふ。

●ア醬油だ醬油だ　斯くて式は目出度終りを告げたり乃ち小島氏客を四階建鋼倉庫の中に案内し本會會頭を始め貴賓の席を最上層に設け盛宴を張る宴酣なるの頃勝手元頗る混雑の模樣ありしが如何にして間違ひけん醬油を詰めたるビール壜を持ち來りて横濱商館より來れる外人數名のコップにナミ〳〵タップリとつぎ込む彼等ビールと思ひ込んだる彼等舌鼓を打ちつゝグイと呑みしが其辛さに堪へ兼ねて顔を蹙むること暫し稍ありてニタコリ笑を湛え手を振り足を振り頭を振りつゝア醬油だ醬油だ々々々々。

●翁の生命ステツキに在り　本邦蠶界の名士八田逸也翁曾てクネツた細い櫻の杖を愛し何處へ行くにも手放したることなし人あり揶揄して曰く「其杖は何んですか詰らんものぢやありませんか」と翁曰く「ソンナ事いつてはいかん之でも大阪博覽會の時に買つたんだ金銀を鏤めたものは澤山あつたが皆自然に叶はんから買はないで澤山な中から自然に叶つた此杖を只一本見附けたのだ……ナニ三錢と馬鹿云つちやイケない之でも大枚一圓五十錢取られたんだと言ひ放つて翁急遽去る重富夕凪生聴て曰く僕も欲しくつて溜らんからイロ〳〵せぶるけれどもドーしてもアノ杖丈けは放さんのだ……寞堂曰く翁の生命ステツキにありかネー。

▲栃木縣の春蠶豫想　同縣に於ける昨年の繭質は掃立當時より兎角天候不順なりしと晩霜害等の爲め桑葉の發育不良に陥り一二齢前後にして投棄したる者多きとに依り、本年の如きは掃立著しく減少するならんと傳へられしも此等は一部の少數にして當業者の多くは寧ろ悲觀するなく生絲も益々前途好望の曙光を放ちあるより、却つて事業を擴張し、前年度に於ける損失を償はんとしつゝある狀勢なれば、昨年の掃立枚數六萬に比し増加する共減少するが如きことなかるべしと云ふ。

▲新絲後輸出額　昨年七月新絲以來二月迄八ヶ月間の横濱輸出生絲は歐洲向二萬三千九百廿一俵米國向六萬八千五百七十俵合計九萬二千四百九十一俵約十八萬三千個にして重なる輸出者及び其仕向地は左の如し。

輸出者	歐洲	米國	計
角八十九番	—俵	三、八五五俵	三、八五五俵
英一番	一、二六四	二、八九五	四、一五九
九十五番	一、八九五	一、三一七	三、二一二
九十二番	一、七〇九	一、八五一	三、五六〇
甲九十番	四、九〇三	三、二七六	八、一七九
七十四番	六五三	四、九三九	四、五九一
百七十四番	四、九二一	二〇四	五、一二五
百六十八番	七〇	五、一九五	二、六五
同伸會社	一五	二、〇〇五	二、〇二〇
原輸出店	一、七八〇	二、八九四	四、六七四
生絲會社	一一二	一五、七〇九	一五、九〇一
三井物產	—	二〇、〇〇八	二〇、〇〇八

即ち取扱高の飛離れて多きは三井及び合名の二社にして叉極端に少きは二百五十三番の九十三俵百六十四番の三百七十俵九十三番の四百九十五俵等也。

▲廣東の收繭高　昨四十一年度に於ける同地方の總收繭高は約三萬四千擔の豫想なりしも之を前年に比すれば二萬擔の減收にして然も爾來八ヶ年中最も不其なりし前年に比するも猶四千擔の減收なるべしといふ。

▲オルター氏の逝去　今より四十五年前横濱に渡來し專ら生絲貿易に從事し本邦蠶絲業發展の上に隱然一大貢獻を爲したる英國人ゼームスウオルター氏は横濱甲九十番館シイベルウオルフ商會の社員として世界當業者の知らざるものなき名譽の人なるが昨年來口頭癌に罹り種々治療を施したるも遂に其効なく去月二十五日横濱山手百五十二番の自邸に於て六十五歳を一期とし逝去したり、惜しい哉　氏の葬儀に際し本會々頭より特に吊辭を送られたるが氏の事歷は次號に之を掲載することゝせん。

▲人造絹製造の沿革　人造絹絲に就て獨逸國の織物工業學校に於ける「クラアウゼ」氏の爲せる講演に依れば「レアウミユル」氏は既に千七百三十四年に於て凝固せる護謨質と絹との狀態が異ならざるより、之を人工的に普通の護謨及樹脂より製出し得べしとの思考を發表したり、之より百五十年以後に於て「ヒレールド、シャアドネ」候は此思考の實現を爲し、硝化「セルローゼ」より成れる人造絹絲を出したるものにして、硝化「セルローゼ」は即ち硝硫酸の混液に浸漬したる木綿纖維を亞爾箇保兒依的の混液中に溶解し且能く之を洗滌して工業的に製出せるものなり、此「セルローゼ」溶液を熱の冷却せざる間に細き小孔を通じ、冷水中に注入するときは直に凝結して細き絲を形成す、絲は始め管状にして内部は尚流動するも之を水中より取出し氣中に於て一層細く紡績するものなり、絲の大さは絡車の回轉速度に依り之を加減するを得べし、斯くの如くして全く凝固せる物質は即ち完成せる人造絹絲にして、此製品は強き光澤を有するなり、其後近年に至り種々の製法發見せられたるが今日最も多く需用せらるゝは「シャアドネ」式の外に「レーネル」絹「パアウル」式光輝絹「ウヰスコース」絹の數種にして、其賣價は普通一磅目付平均二十乃至二十五マルクの間に在り、人造絹が斯の如く廉たるに拘らず、繭絲に比して其產出額が十分の一にも至らざるは、天然絹絲の如き耐久性を有せざると傷け易くして且つ耳織を困難とする等の欠點あるに依るなり。

▲富山支會總會　大日本蠶絲會富山支會は其第三回總會を本月三日富山市公會堂に於て開きたり、來會者五百餘名夫々記念繪葉書富山縣蠶業統計圖及桑樹器其他を頒布したるが、一同の着席を待ちて永井副會長開會の辭を述べ宇佐美會長戊申詔書を捧讀し渡邊幹事長は四十一年度業務成績を報告し、夫より松平會頭の告辭本多東京蠶業講習所長其他の祝辭朗讀ありて議事に移り、午後五時閉會後有志百餘名富山ホテルに懇親會を開き互に歡談時の移るを知らざりき、當日の議案は左の如し。

第一　決議事項實行委員設置の件
第二　會員募集に關する件
第三　第三回品評開館の件

右三問題とも原案の如く可決し更に大に發展を講ずることゝなしたりといふ。

▲大分縣蠶業視察團　大分縣蠶絲同業組合の發起にかゝる大分縣蠶業視察團の一行は去る十日大分町を出發し、京都、滋賀、三重、愛知等各縣の製絲業を視察し、十六、十七、十八、十九の四日間、原、中澤、田中の各製絲場に三井物產、生絲合名同伸等の各直輸會社及び百六十八番其他一二の外商を歴訪し、併せて市場に於ける取引狀況、輸出現狀、生絲檢査の實況等を親しく視察し、今廿日東京蠶業講習所を訪れたる後、東京に於て解散の豫定なりといふ一行の氏名は左の如し。

監督大分縣技手	安東誠
同大分縣蠶絲同業組合長大分製絲所	麗山鶴二郎
日出製絲所	久保田德藏
矢野製絲所	矢野丑太郎
蒔田製絲所	池永光雄
石田製絲所	石田豐臣
東海部郡製絲所	請田眞作
三重製絲所	佐藤伊吉
金子製絲所	村瀬竹五郎
豐後製絲所	荻原數馬
大野製絲所	幸大八
直入製絲所	山口一太
久住製絲所	渡邊彌惣
豐中製絲場	菅沼市太郎
同	中野恒太郎
馬城製絲場	國廣蓮
宮岡製絲所	丸山陞造
蠶種業	太田武亮

文藝

懸賞 俳句

花の本花翁宗匠選

秀逸

人

花待つや我に立日は氣もつかず　地

蛤やあさりし夜のゆめに迄　天

待つ親のありて下りけり花の山　甲斐保

未た発す七十二年花の夢　選者　花翁

懸賞 狂句

（第十五回投票）

▲題　春歌

（二百二十句）

宮城県仙台天位門前や打日から折日と誤植したり　延誤

人賞

かこつけて汝も蠶を見舞に來　日向　鬼塚如笑

◎地賞

不景氣で蠶種屋の法螺も裂出來　丹波　大槻古城子

◎天賞

糸引て親の借金棒に引き　岐阜　岡本江風

懸賞募集 俚謠 (第十五回披露)

▲應募數 三百二十首

眉も遠山霞める日和桑の若葉に姉妹 愛知 蠶奴
二人中よく蠶飼なすればお蠶も眞似して二ツ繭 同 同人
口で種賣る種屋に惚れて口で言はれぬ苦勞する 同 同人
親に着せるか工女が可愛繭を赤裸にしてまでも 山梨 一笑
人にかけれた御恩を金でかへすかひこのいぢらしや 羽後 羽仙
粋な岡惚の其のなれの果今ぢや渦中の二ツ繭 群馬 可憐
主は才取り妾しや糸取りて御國の御奉公腕くらべ 岐阜 江風
廻るこわくに唄たば合せ日毎夜毎に絲を引く 長野 曉星
耳をすませば子の泣く聲は夜桑するかやいぢらしい 同 同人
製絲工女も御國のためとかける襷は赤十字 信濃 滿水
人が寝ふとはた笑ふとはなれまいぞな二ツ繭 伊勢 人寄
俵錦も未だ織かけの緋も目に立つ若もみじ 長野 桂月
縮も豐作蠶もあたり田地もどして嫁をとる 福島 桐樹
主にや困る蠶の性で女の手にては丸はだか 茨城 花峰
玉の繭さへさて氣にかゝる願十七花盛 山形 一松
四方の山邊は桑畑づゝき續く山家はみなかひこ 福島 清流
乗せてお呉れな危く御座る野暮な種屋の口車 京都 素華
心散らしうや蠶飼は出來ぬ散らぬやうにと散る櫻 同 同人
當り蠶の七人家內役目そろうた繦の紳 備後 花童
流れかけたる顔の晴れ着つなぎ止めたるお蠶の絲 愛知 合有
三日見ぬ間の櫻に勝り咲いて嬉しい繭の花 丹波 古城子
蠶飼つかれのまだその上に主な氣遣ふ身のつらさ 日向 知笑
今は樂しく引く三味線も元は苦勞の絲でなる 遠江 梅枝
繭買來たかと障子を明けて見れば種子屋が金取りに 同 同人
月が重なりや肉が重くなる早く上げたい此かひこ 山梨 朝日丸
夫婦中よく蠶飼も終へて轉地療養が流東の窓 羽前 孤舟
戰死した主あきらめながら二つ繭見りや思ひ出す 丹後 染羽
御蠶の氣嫌は姑の氣嫌御蠶がよければ姑良い 愛知 岬東

◎五彩

色に迷ふな人造絹絲が盡くとも切れたがる 羽前 枯葉
主によく似た今年の蠶眠るも起るもよい機嫌 埼玉 素琴
顔の皺には愛想が盡きる繭の皺には氣がさえる 愛知 閑水
島田髷に惚れてか蠶が添ふて咲かする繭の花 同 岬東
お蠶は正直飼はれた禮に尽く作つた繭の皮 同 松堂

◎人賞

村のお絹は蠶の精か繭の面に蛾の眉 熊本 松岡ゆふは

◎地賞

髪の亂れは蠶の爲めよ心の亂れは主の爲め 羽前 松田東雲

◎天賞

工場出て見りや彼の山見ゆる故郷戀しや主の里 長野 小山一葉

◎選者吟

壺は糸繰る工女と見えぬ意氣な姿よ朧月 鬼川

懸賞募集 一と口噺 (第十五回披露)

秀逸

◎小供の洋行 甲斐 文友

甲『私の所の孫は九才で洋行しましたよ』乙『僕の子供はもつと早くしました』甲『では何才の時でしたか』乙『何才どころか母親の腹の中で洋行しました』

◎李藏 埼玉 旭先生

或る人『ネイ李藏さん世間の人はお前の事を新しい煙管といふぜ』李藏『それはおれが何事でも通りのよい譯が解つて居るからさ』或る人『ナ……何にそうではない詰らない人だからさ』

◎臭い鏡 埼玉 利根桑園

妹『姉さんの鏡は臭いの』姉『なぜ』妹『でも姉さんは鏡を見ると屹度低い鼻をつまんで居るのに』

◎月給取 三重 窓月

母『お前は月給十五圓も貰らつて居て足らん〳〵とは何事をするのだ』息子『でも米が高くてくえん(九圓)也、薪が高つて煮えん(二圓)也、酒が高くて醉えん(四圓)也で十五圓ではありませんか』

◎當り繭 埼玉 宮倉歌子

客『蠶種屋さんあなたは一度もかひこがはづれたと言ひなされたことはありませんねえ』蠶種屋『左様中すのがあたりまへ(當り繭)です』

◎鼠 備後 白峰

甲『僕の家には鼠が二石でも三石でも居るよ』乙『馬鹿を云へそんなに何石と云つて居るものか』甲『それでも天井でもゴト〳〵(五斗五斗)桑の間でもゴト〳〵(五斗五斗)戸棚でもゴト〳〵(五斗五斗)』

◎盲目者 岐阜 山口金俊

甲『あまり今晩は暗いからすまないが提灯を貸して呉れないか』乙『そんな盲目者が暗いとて提灯なぞ入用ものか』甲『でも明日人でもぶつかるからよ』

◎人賞

◎無學の夫婦 羽前 一松

夫『今年は暦が安いから三年分買つて置かう』婦『未だ去年のが大丈夫ですよ』

◎地賞

◎豆腐屋

或る人『お婆さん相變らず達者で豆腐をお拵へですか』老婆『ハイ〳〵相變らずマメで暮して居ります』

◎天賞

◎揉んで取つた紙幣 信濃 龍崖

客『按摩さん昨晩のお釣りの紙幣は大變に皺だらけで有つたナ』按摩『ハイ揉んで取りました紙幣ですから』

懸賞募集 五行文 (第二回披露)

高橋鬼川選

秀逸

◎蠶疲 埼玉 長島露風

蠶も四眠起るとめつきり忙しい、最一週間位の辛抱と云ふので眠る間もなく世話をする、蠶室の前には誤が山の様に積て有る、倅の桑の枝の上にまきちやんが三十有餘日のつかれに眠る氣もなく片手に誰な持た儘夢路に這入た樣だ。

評に曰く 苦中快あり

◎蠶の掃立 長野 山崎山國舍

AVIS.

1°. Le bulletin de l'Associations sériciicole du Japon est l'organe, des membres de cette societé qui compte actuellement plus de 30.200 membres.

2°. Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous les faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3°. Dans ce rapport sera inscrit dans une langue européennes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4°. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par leés interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Sériciicole du Japon.

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 30.200

2) This association has for its object the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

4) The association will collect and publish articles and studies foreigners of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultural Association of Japan.

明日は明治節だ。蠶の卵だけの蠶が孵化して蠶の繭が出来る。蠶の繭の出来る日は蠶の誕生日だ。蠶の繭の出来る日は蠶の誕生日だ。蠶の繭の出来る日は蠶の誕生日だ。

◎復讐　家庭

先ずと言ふ。呼んだので振返ると、愛嬌の溢れる顔の蠶が、蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

◎桑摘み　丹波　大槻古城

蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

◎蠶の卵　岩手　中澤如泉

蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

◎五月雨　徳島　松島汀風

蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

◎給桑　愛知　尾張　銀波

蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

◎蠶　野　蠶狂兒

蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

◎蔵桑　徳島　門田　澤碩

蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。蠶の繭の中から出て来た。

▲人賞

◎糸取り　札幌　阪　青澤

糸取る美代さんのふつくりと艶々した頬を蒸立つた繭の蒸氣が掠めて昇る。障子を隔てゝ奥の間から『もう年頃ですから』と云ふ客の聲。美代さんは、はたと手を止めた面には、さつと紅潮が差した。

評に曰く　婦人の最も樂しき時代

▲地賞

◎繭かき　群馬　小見可憐生

今日は書入日だ。父は繭から糸の繭を受取つて一々綴折の半紙に書付ける。源公は繭の籠を運び、俵目棚をガタ〳〵と取り片付て居る。夕方にはもう蠶室はガランと成つた。奥の廊下には白い大山が築かれた。夕風がいと〻涼しい。

評に曰く　晩酌の用意も已に成れり

▲天賞

◎蔵桑　徳島　門田　澤碩

澄み渡りし空は藍を流したよう、蟬く霞うゝかな春の日、妻と二人で桑に境ふ。『お母さんこゝに』と小供が置き去りした重箱の蓋とれば蓬餅。ころ〳〵と七つ八つ彷に番茶の出ばな、春風朗に桑の若芽を吹いて、遠くより牛の鳴聲聞ゆ。

評に曰く　一幅の名畫

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Soie. Silk. Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatures.	Maximum du prix. Highest prices. Prix. Prices
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	118	208	39	—	Kōshuseishi.	990
2	48	375	—	—	Nanaogumi.	965
3	81	408	39	1,001	Kōshuseishi.	995
4	200	339	39	—	Shimonitasha.	1,020
5	139	363	21	—	Yatsukuniseishi.	915
6	86	207	26	397	Nishisansha.	935
7	—	—	—	475	——	—
8	437	222	63	—	Marukoseishi.	1,020
9	70	473	37	—	Hayashigumi.	935
10	110	232	55	1,062	Ishihanaseishi.	955
11	—	—	—	—	——	—
12	209	228	20	—	Iida-katakare.	970
13	132	336	55	4,69	Biwaseishi.	970
14	—	—	—	—	——	—
15	145	388	33	—	Oguchigumi.	935
16	102	216	383	—	Yamamaruseishi.	935
17	64	554	71	1,323	Fukusukeseishi.	1,020
18	140	344	41	—	Shummeisha.	910
19	135	457	43	—	Tōkaiseishi.	972
20	111	476	123	917	Amtaniseishi.	960
21	—	—	—	—	——	—
22	299	561	42	—	Tajimakyodō	980
23	55	48	103	—	Kimphosha.	1,025
24	175	404	55	—	Sekikawaseishi.	935
25	169	423	19	861	Fukokukwan.	935
26	240	296	23	—	Kagoshimakyodo.	1,030
27	128	42	39	1,210	Dairinkwan.	1,000
28	190	—	—	1,841	——	—
—	—	—	—	—	——	—
—	—	—	—	—	——	—
—	—	—	—	—	——	—
Total	3,716	8,561	1,036	7,556	——	—

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

TABLE OF MOVEMENT DIFFERENT INDUST

(Janvier 1900.) (January 1900.)

	Report. Brought over.	Arrivé. Arrival.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back.	Are
Filature.	15,893 *Picul.*	3,073 *Picul.*	6,330 *Picul.*	— *Picul.*	766 *Picul.*	11,792
Zogori. Retsel.	4,371	212	1,510	—	151	3,023
Kokeda. Orihayashi.	1,077	248	500	—	69	727
Ashiwa. Other.	133	38	84	—	57	35
Total.	21,468	3,716	8,523	9,256	1,038	15,577
1978.	20,072	2,743	6,148	5,641	965	19,805

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois de Février dernier.

L'inertie des affaires ayant continué, notre marché des soies a été plongé dans une profonde accalmie. Toutefois, l'arrivage des marchandises, qui s'est monté à 6,607 1/2 balles, est en augmentation de 1,728 balles sur la période correspondante de l'année précédente. Le nombre des balles traitées a été de 5,842, soit en augmentation de 153 1/2 sur l'an dernier. Les dernières dépêches de l'Europe et de l'Amérique annonçant toujours l'inertie de leur marché rendent nos affaires presque nulles. Les articles à terme ont vu leurs prix baisser au-dessous de yen 90, et pour les articles à livrer sur place, les vendeurs sont disposés à vendre leurs marchandises à des prix proposés. Aussi Shinshu Extra No 1 était sur le point de baisser à yen 900. D'après les exemples précédents, comme la soie accuse le plus bas prix au mois d'Avril, nous ne pouvons pas, dès à présent, prévoir quand le retour à un niveau normal reviendra.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

THE YOKOHAMA RAW-SILK MARKET.

The general condition of Yokohama market during the month of February is summarised as below.

As dulness reigend through the month, no active transactions were conducted, and there was no prospect of immediate recovery. During the period, only 6,607 1/2 bales were put on the market. But when compared with the corresponding period of last year, these figures show an increase of 1,728 bales, while the number of transactions concluded was 5,842 bales, an increase of 153 1/2 bales. Moreover, telegrams from Europe and America continued to report news of stagnancy and inactivity, so that the market suffered the more despondency. From the time when the quotation reached the stage of Y. 90, the sellers began to assume an attitude of concession and compromise; and Extra No. 1 of *Shinshu* even threatened to be quoted at Y. 900. Indeed at the time of writing this note, there is no indicating the future trend of prices. But as is generally the case every year for the quotation to reach its lowest level in the month of April, we are inclined to believe that there will be no immediate relief of this unsatisfactory state of things for some time to come.

The following table shows the movements of silks during the relative period.